

戦後・被爆80年

戦争にまつわる体験 記録集



川西市

川西市では、令和2(2020)年から戦争にまつわる体験記の募集をおこなっています。

市民からお寄せいただいた貴重な体験記は、すべて市のホームページに掲載させていただいています。

また、毎年2~3編を「広報じんけん」(全世帯配付)にも掲載させていただいています。

今年は、戦後80年という節目の年です。そこで、今まで(令和2年~令和6年)にお寄せいただいた体験記54編を1冊の記録集にまとめることにしました。

戦争体験者は年を重ねるごとに少なくなり、寄稿の数も少なくなってきました。

そのため、戦争に関連する体験(者)のお話(記録)はより一層貴重なものになってきています。

ここに掲載された体験記は、これからの社会、未来を担う子どもたちへの貴重なメッセージだと思います。

この記録集が、皆さまの心の中で何かを問いかけ、共に未来を思い描ききっかけとなることを願っています。

過去を振り返り、平和の灯火を未来へと繋ぐために。

※寄稿者の年齢は、体験記執筆時の年齢ですので寄稿年と一致しない場合があります。

※文字(漢字や数字含む)の使い方はできるだけ原文を尊重していますが、統一性の観点から一部校正しています。

※歴史的事実関係等においては、執筆者の記憶を尊重し、そのまま記載しています。



目次

令和2(2020)年度寄稿

①「姫路駅での思い出」	香西 春美……………1
②「女子挺身隊」	山田 昌……………1
③「戦争に翻弄された母」	坪井 和代……………2
④「幼き日の思い出」	山上 照美……………3
⑤「川西航空へ空襲」	鎌田 清子……………4
⑥「学徒動員と大阪大空襲の記」	匿名……………4
⑦「私の戦時中から敗戦後にかけての記憶体験」	柿谷 昭……………6
⑧「私の少年時代 ～今こそ憲法をみんなの『宝』にして活かそう」	松岡 正章……………7
⑨「日常生活を潰され 殺されていった戦争の怖さ」	勝田 民子……………7
⑩「戦争のない平和な世界が訪れることを願います」	小比賀 千寿子……………8
⑪「和歌山空襲と家族の記録」	保ヶ渕 八重子……………9
⑫「父は出兵、母子で戦火をくぐりぬけて」	青木 明……………11
⑬「辛い記憶だけが残っています」	辰巳 ふさ子……………13
⑭「日本国憲法は私の生涯の指針」	林 朝子……………14
⑮「父の勝手な行動で命拾いをしました」	太田 正子……………15

令和3(2021)年度寄稿

⑯「戦争は二度と起こしてはいけない 子供心に誓う」	中岡 正次……………16
⑰「亡くなった妹は戦争の犠牲者」	永山 夫至子……………17
⑱「空が真っ黒になるほど、B29爆撃機が編隊で襲来」	山岡 幸子……………18
⑲「孫に語り伝える戦火のむなしさ」	川崎 進……………19
⑳「私の友人が陸軍士官学校受験当日に広島で原爆焼死」	鳥飼 國治……………20
㉑「ひっきりなしに『空襲警報』、激しく銃弾が降り注いだ」	蔵所 悟……………20
㉒「反戦の思いを若い人に託して」	比屋根 道子……………21
㉓「満蒙開拓青少年義勇軍に応募 終戦で懸命の逃避行」	中川 昭次……………22
㉔「戦争が教えてくれたもの」	斉藤 美代子……………24
㉕「私の戦争体験談」	和泉 清……………25
㉖「満州からの引き揚げ」	福岡 通子……………26
㉗「『飢え』の思い出」	松本 篤弘……………26
㉘「私の戦争体験」	友國 富貴……………27
㉙「太平洋戦争の戦時下～中学3年間～」	白川 孝道……………30
㉚「苦難の時代」	山田 昌……………32
㉛「母の遺志を継ぐ父の戦没状況調査」	川口 正浩……………34
㉜「大阪第一次大空襲」	桐本 晨子……………35

③③「戦争の思い出」

③④「耐えがたきを耐えた時代を語り継ぐ」

③⑤「希求」

③⑥「戦争と私」

河村 田鶴子…………… 36

西 百合…………… 37

加茂 義光…………… 38

岡崎 美知子…………… 40

④⑦「自分で護った小さな生命(いのち)」

④⑧「梅桃(ゆすらうめ)」

④⑨「孫達へ」

⑤⑩「戦争を聞かされた思い出」

山本 一恵…………… 51

島本 幸昭…………… 52

匿 名…………… 53

東田 すみ子…………… 55

令和4(2022)年度寄稿

③⑦「五歳が見た戦中・戦後」

③⑧「はじめて見た故郷日本」

③⑨「うばわれた小さな命」

④⑩「終戦のあとさき」

④⑪「空襲におびえた昭和20年」

新田 紀久子…………… 41

大林 芙美…………… 42

植田 康子…………… 43

安井 弘子…………… 44

竹田 ムツ子…………… 45

令和6(2024)年度寄稿

⑤①「母の少女時代」

⑤②「幼少年時の戦争体験」

⑤③「食べる物がない」

⑤④「思い出」

滝井 知子…………… 55

梶田 忠勝…………… 57

山田 昌…………… 58

伊藤 啓子…………… 59

令和5(2023)年度寄稿

④②「空はどこまでも真青」

④③「空襲警報に殺された」

④④「平和への思いを届ける」

④⑤「満州での難民生活と引き揚げ体験」

④⑥「戦争にまつわる体験談」

山内 利津…………… 46

神谷 勉子…………… 47

匿 名…………… 48

匿 名…………… 49

和田 孝三…………… 50



1



「姫路駅での思い出」

香西 春美（85歳）

「新聞読んでお父様。涙を拭いておっしゃった。あの12月8日の日、太平洋の真中で大きな手柄をたてたのは、若い9人の勇士です。」この詩には曲がついています。大人達から聞いて覚えました。9人の勇士は鹿児島県の知覧からハワイの真珠湾（パールハーバー）に向かつて飛び立って行ったのです。真珠湾に停泊していたアメリカの軍艦めがけて突げき、この事件が、第2次世界大戦勃発の契機となったのです。十数年前にハワイ旅行した時にパールハーバーで当時のままの軍艦を見ました。胸が熱くなり、涙した事すっかり覚えています。戦中、兄3人は出征、長兄は陸軍で今の北朝鮮の平壤に駐屯。次兄は中国派遣軍に。海軍の3兄は南方に派遣される事になり列車で横須賀から呉の軍港に向かう途中、兵庫県の姫路駅に停車するので、是非逢いたいと電報が県内の実家に届きました。1944年8月。両親と私達姉妹はホームで列車が来るのを待っていました。窓から身を乗り出して手を振る兄の姿が見え、私達は走り寄り、わずか15分ほどの再会を喜びました。列車はゆっくり走り出し、母は兄の名前を叫びながらホームの端まで走って行きました。あの時の母の姿を一生忘れないです。終戦後、兄3人が順に無事生還。母

2

「女子挺身隊」

山田 昌（90歳）

は玄関でしっかり抱きしめ鳴咽。ひたすら無事を祈った両親の強い心に深く畏敬の念を抱いています。

昭和20年、高等女学校（今の中学3年生）の4月末に5月からは「皆さんはお国の為に女子挺身隊として、工場へ働きに行く事になりました。学生生活は今日までです。」と、それぞれ分担されて皆、別れ別れになりました。名残をおしんで夕やみせまる頃まで学校にいました。淋しい思いでした。私は池田のダイハツ工場へ行く事になり、そして見た事もない施盤工として働く事になりました。バイトとか云う刃物を差し込んで物をけずるのですが、エンピツけずりとちがってなかなかうまく出来なくて困りました。みんな出来ない事ばかり、機械になやまされて大変でした。高射砲の止め金とか？

工場の班長さんからは「みんな、お国の為に戦地で働いている兵隊さんにすまない、こんなペケ物ばかりこしらえて、物資不足の折から何と云う事だ」と叱られました。みんな泣いてしまつて、その時付きそいで来られていた先生2人が「何年もかかってなる施盤工がする仕事をわずか15歳の何も見た事も持った事もない、しかも、女子がそんなにきつちり出来る事ありません、もう少し大目にやさ

しく見てやってほしい。生徒はなまけてなんかいません。一生懸命にやっていて出来ないのだから。」と云って下さった。皆うれしくて、又泣けてきた。生徒を見守って下さると思うと涙が止まらなかった。それから間もなく終戦になった。

あれからもう今年で75年、もうその時の乙女も90才。孫やひ孫と楽しく日を送っていますが、この子供達には、あんなつらい青春を送らなくてもよい、平和が続く日本であってほしいと願っています。

3

「戦争に翻弄された母」 ほんろう

坪井 和代（83歳）

戦争が終わり70年が過ぎた。傘寿（80歳）を過ぎた私が現在までの記憶をたどり私と弟2人を育ててくれた母のことを記してみたい。母は特養施設でお世話になり、95歳で、亡くなった。母を思うといつも涙がにじんでくる。

母は、18歳で農家の次男であった父のもとに嫁いできた。その後、満蒙開拓団として両親が私を連れて満州に渡ったのである。その後、私が学齢となり、実家の祖母のもとに預けられ、母は生まれた弟を連れ、再び満州に旅立った。私を残しての渡満には心痛むものがあったと思われる。その後戦局が激しくなり、父は徴用され軍隊へ。

祖母は預かった私を一生懸命育ててくれた。私が国民学校2年

の時終戦を迎えた。いつの日だったか父の戦死の知らせが届いた。祖母はその日から何日も何日も夜眠ることができず、本を読んだりして悲しみをまぎらわせていた様子だった。

私が4年生の冬のある日、急に玄関に2人の弟を連れた母が着の身着のままの哀れな姿で帰ってきた。弟は4歳と2歳で畳の上に2人とも寝させられ、ほとんど身動きもできないくらい痩せこけていた。母、弟の3人とも栄養失調となっていたのである。

母はしばらくして満州から引き揚げてくる時のことをボツボツ話してくれた。

開拓団として暮らしていたのも束の間、戦況が悪化するにつれ現地こころの男性は悉く徴兵され戦地へ赴くこととなり、女子供のみがその村に残された。3人目の子を妊娠していた母は、弟と身重の体で暮らすことになった。その後、間もなくして終戦となり、村をあげて引き揚げることとなった。それからはどうしても日本へ帰ろうという気持ちのみで、ソ連軍の襲撃をすり抜け、村人こぞって歩いて朝鮮の方向に進んだそうだ。途中、母は産気づき倉庫のような所で2人目の弟を出産した。同行していた女性たちがみんなで助けてくれたとか。

2人の子供を連れて帰る途中、中国の人たちに子どもを置いてい



くように言われたが、何とかして日本に連れ帰ろうと必死の覚悟で断った。やっと日本に着いた長崎沖の船中で疫病が流行し、何ヶ月も上陸できなかったとか。やっとの思いで実家にたどり着くことができたのだ。

父は33才で戦死。その時は母28才であった。帰郷した母は虚弱な二人の弟と10才の私を祖母と2人で育てていかねばならない。またまた生活と子育てのために必死で働くことになったのだ。少しの農地だったが、女手一人の農作業は大変きつかったようだ。農業だけでは暮らしが大変で小さな雑貨店も始め、祖母とともに昼夜問わず黙々と働いていた。

私達子供3人はやがて自立、母は子育てを終えた。その頃は母の足腰は痛み始め、やがて腰は二つに折れ曲がってしまった。

引き揚げ中にやっとの思いで出産して連れ帰った次男に事故で先立たれた。悲しみはいつまでも続いた。

施設で最期を迎えた母、私が帰省して会いに行ってもだんだん会話もできなくなっていた。苦勞続きだった母に感謝の言葉も届かなくなってしまう。互いに心が通じ合える間にありがたうの気持ちをもっと伝えたかった。それが今になっても悔やまれてならない。

4

「幼き日の思い出」

山上 照美（81歳）

私は、昭和14年8月に広島県の安浦町という、海や山の自然に恵まれた農家の6人兄弟の末っ子として生まれました。2才のころに戦争が始まりましたが、まわりは山々と田畑に囲まれた所で、終戦を迎える年まで、いわゆる空襲などはありませんでした。それでも敵が攻めてきてはいけない、見つかつてはいけないと、家の土壁に墨を塗り、真っ黒にしていました。今でもはつきりと覚えているのは、小学校にあがる前には、米軍の飛行機が飛んできたかと思うと空からアルミの切端のようなものが無数に降ってきて、それを近所の子たちと一生懸命拾ったことです。無数にキラキラと降ってくるそれは、まるで雪か星が降ってきたかのように仲間と共に我先にと追いかけてました。拾い集めて役場に持って行くとたいそうほめてもらえました。それは、米軍による電波妨害のためのものだったようですが、子どもながらに自分たちもお国のためにひと役をかっていのだと士気高揚したものです。

また、戦闘機の燃料代わりになると聞けば、松の木を傷つけて松ヤニを集めたりと、戦火こそまぬがれていましたが、〃進め一億火の玉だ〃の勢いで、野山の中でも、自分たちでできることは当時だった6才の子どもでも、日常の一部でありました。余談になりますが、同じ時期に、後に伴侶となります妻は、大阪府吹田市で連日、

空襲警報が響く中、飛行機が去るまで、暗く狭い防空壕に逃げ込んでいたこと、足にゲートルを巻いた兵隊さん(?)が、防空壕をたぐさん掘っていたことを、3才ながらに、よく目に焼きついて覚えているそうです。同じ昭和20年という年に経験は違えど、まだまだ大人から守られている幼い子どもでしたが、戦争という出来事に翻弄されていたように思います。そしてその年の8月6日、よく晴れた暑い日の朝、家の表にいた私は、何かが光ったと思って空を見上げた途端、山の向こうから、見たこともないようなキノコの形をした雲が天高く立ち登る様を見ました。約40km離れた広島市に落とされた原子爆弾でした。

5

「川西航空へ空襲」

鎌田 清子 (90歳)



第2次世界大戦末期の1945年7月27日、私は女学生3年生。母と娘3人で、西宮市甲東園2丁目に住んでいました。父は少し耳が聞こえづらくて兵役に出ずに大和証券九州福岡支店長で、赴任中。朝、空襲警報発令で親子で裏庭へ出て空を見上げると、南の上空をキラキラと銀色に光る編隊が飛んできた。と思う間もなく、ピュル、ピュル、ドカン、ドカン、と破裂する音、ああ助かったと思いきや空を見ると、機は北の方へ行きました。家に入ると、瓦は落ち、

ガラスは割れ、戸棚の物は滅茶苦茶、障子は破れいぐんでいました。片付けて、表の通りになると、戸板で作った担架に人を乗せ、南の方へ行った。先日、同郷のクリスチャンから、あの時、お寺にもう置く場所がないので、甲東教会にもお願いに來られたそうです。後で、川西航空「仁川」への爆撃だったと聞きました。5トン爆弾は、阪急電車の線路と3軒北の家の庭(家族全滅)、5軒南の家にも、ここに住んでいられた上級生は顔に傷をされました。3発だけだったのが助かった。

姉は十三の工場、私は学校工場に動員された。姉は空襲で阪急電車が不通になったので、十三から線路の上を、神崎川、武庫川の鉄橋を渡り帰って來ました。

母は上の2人が、軍需工場で時々食糧を配給してもらえたので、終戦後すぐの方が大変だったと云っていました。

何の傷もせずに、90才迄生きられたのは、不思議のようで、神様に感謝しなければいけませんね。終。

6

「学徒動員と大阪大空襲の記」

匿名 (89歳)



あれからはや75年、激しく揺れ動いた昭和の時代も遠くなって、あのつらい戦争体験も世の移ろいと共に風化されつつあります。あ

の悲惨な体験を思い出し生かして平和の尊さをかみしめ、二度と戦争の無い事を祈ります。

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まりました。当時小学校6年の私は頑張って府立市岡女学校に入学しました。その喜びも束の間で、森下仁丹工場を初め、枚方の香里園造兵廠製造所こうりえんぞうへいしやう（陸軍造兵廠香里製造所）に、詳しいことは聞かされずに学徒動員されました。当時14才の女学生でした。戦争も激しくなり親元を離れて粗末な寮に入り朝早くから交代で夜勤もある砲弾造りにと、お国の為、みんな命がけで働きました。ひっきり無しに空襲警報が出てB29の編隊が飛来して爆弾を落します。その度に製作中の砲弾を箱毎、胸に抱きかかえて一人ずつ防空壕に逃げ込みました。今思えば自殺行為ですが、当時は命より爆弾が大事でした。3月の大阪大空襲では、B29の大編隊が空をおおい爆弾と焼夷弾を次々と雨の様に落として、大阪の空が真赤に焼けるのが香里の丘の寮から良く見えました。「父さん、お母さん、早く逃げて下さい。」「どうぞ、命だけは助かって下さい。」と友達どうし抱き合って泣きあかしました。3月の大阪大空襲のあくる日、眠れない夜を過ごした夜勤が終って非番で帰ろうとして驚きました。大阪方面は一面が焼け野が原で電車も動かず、西九条の私の家も焼け落ちて枠組だけです。「お母さん!!お母さん!!」と何度呼んでも返事が無く、とうとうあきらめて仕方なく祖母の住む森の宮方面へ向かいました。京橋、森の宮の惨状はすさまじく目をおおう悲惨な光景です。電車は焼けて

動かず、此の世の物とは思えない焼け跡を、祖母は大丈夫かと祖母に逢いたい一心で遠い道のりを一人で歩きました。やっと家にとどり着くと足腰の弱った祖母は杖をつきながら、顔中涙でくしゃくしゃになって『よかった。恐ろしかったね。』と抱き合って喜びました。祖母は一人息子を戦争にとられ北支で戦死した知らせを聞いてからすっかり元気を無くして痩せ細ってしまいました。色々近況をおしゃべりしながら大切に取っておいた玉子を出して私の好物だった玉子丼を作ってくれました。お父さんお母さんは、3月の空襲で、命からがら岡山の親類を頼って疎開した時に祖母も一緒にときぞわれたけど、『ひよつとして息子が帰って来る様な気がして、此の家から離れられへんのだ。』と泣きながら話してくれました。もう遅いから泊って行きなさいと云われたけど、香里の寮に今日中に戻らないと先生や友達もみんなが心配するので焼け野が原の恐ろしい光景の中を一人で歩いて寮に帰りました。



「私の戦時中から敗戦後にかけての記憶体験」

柿谷 昭（88歳）

私は昭和6年11月23日生まれの88歳です。尼崎市杭瀬3ノ坪にあつた繊維会社の社宅で生まれて幼年期を過ごし、昭和19年3月尼崎市長州小学校卒業、同年4月尼崎工業学校を受験して入学しました。入学試験ではペーパーテストは無くても5教室を順次めぐる面接による口頭試験でした。一学期は工業学校1年生として通常の授業、国語、幾何、代数、化学、英語、歴史、体育、武道等の授業があり、土曜日は終日実習で鍛造、木工、鋳物、仕上げ等に分散して実務教習を受けました。

夏休みが終わり、2学期9月に登校すると1年生全員勤労動員を命ぜられ、私は尼崎市杭瀬にある大同製鋼の検査課に10名ほどの同級生と共に配属されました。作業内容は製品である鋼板の検査で、材質や表面の傷の有無を調べ、幅と長さ厚さを測定する作業です。勤務は、1日8時間、週6日、日曜休日、給料は月額30円で校友会費など差し引いた25円程は全額貯金で、貯金通帳は派遣教師が一括管理して、特別の事情がない限り引き出し不能でした。（当時義務教育修了者の初任給は月額100円程だったと聞いています。）

昭和20年6月中旬、動員で勤務していた職場及び居住していた住宅共に空襲で全焼、妊娠中の母と4歳の弟と共に母の郷里徳島

の田舎に避難し、親戚の納屋の2階の一部を借りて置いてあつた古い機械や農具などを片隅に移動させるなどして^{むしろ}蓆2枚ほどのスペースを確保して、電燈も畳もない板間の部屋で避難生活を始めました。

8月、日本の敗戦で戦争は終わりましたが、避難生活を終える見通しは無く暗闇の2階暮らしは継続、せめて義務教育は終えておきたいと思った私は、田舎の小学校高等科2年に編入して通学し、妊娠中だった母は11月、暗闇の納屋の2階でローソクを頼りに女子を出産しました。（この時生まれた女の子は、現在川西市で健在。）

21年11月尼崎工場の焼け跡整理を終えた父に、大阪の貝塚工場へ転勤辞令が出て工場社宅の1軒を与えられ、私たち家族も疎開生活に終止符を打ち、12月貝塚工場社宅に転居しましたが、茶碗などの食器や寝具は会社のマークのついた工場からの借り物ばかりで、私も父と共に働き1年程掛かって自前の家具に置き換えることができて、やっと戦災という情けない嫌な過去から少し遠ざかることができた様に感じたものです。



「私の少年時代」

「今こそ憲法をみんなの『宝』にして活かそう」

松岡 正章（86歳）

私は現在86歳です。生まれは、宮崎県で、鹿児島県と熊本県との隣り合わせの、のどかな農村です。私が小学校2年の時、1941年12月8日に戦争が始まりました。

そして、私たちは「※小国民」と呼ばれ、学校は「国民学校」と呼ばれることになりました。それだけではなく、「鬼畜米英」の名の下、戦時色が濃くなってきました。「ぜいたくは敵だ」、「欲しがりません勝つまでは」と煽^{あお}られました。

学校での授業時間は半減しました。農家への手伝いに行きました。農家の主力だった人たちは多くが、軍隊へ召集されていたのです。音楽は廃止同然、許されるのは軍歌だけでした。軍歌を唄いながら、手製の竹槍を持って敵に突っ込む訓練に明け暮れていました。

敗戦が濃くなり、米軍が沖縄に上陸するというので、多くの疎開児童が宮崎にもやってきました。今にして思えば、小学生が親元を離れてどんなに寂しかったろうという気持ちでいっぱいです。

以上述べたことは、私の少年時代のごく一端にすぎません。このような理不尽をもたらすのが戦争です。

憲法は国民主権、平和、基本的人権の尊重をうたっています。こ

の憲法を守り、それを活かすことしか、ほかに道がありません。

二度と戦争の惨禍を許してはなりません。子、孫、曾孫のためにも。

※「小国民」とは

日中戦争から第二次世界大戦までの日本において、銃後に位置する子どもを指した語で、年少の皇国民という意味がある。これはドイツのヒトラーユングントで用いられた「Jungvolk」の略語である。現在では死語である。（ウィキペディアより）

「日常生活を潰され 殺されていた戦争の怖さ」

勝田 民子（88歳）

戦前私の実家は旗屋を営んでいて、大阪市北区中崎町に住んでいました。戦火の激しさが予感された1944年に、母親の里であった東大阪石切へ縁故疎開をしました。従妹の家に住み、井戸から水を汲み上げるなどの力仕事に頑張りながら暮らしていました。東大阪石切でアメリカ軍のB29の爆撃に遭遇しました。パイロットの顔が見えるほどの低空飛行でした。1945年3月13日終戦の年に予定されていた、東大阪石切の国民学校の卒業式は延期されて、家が焼け出された方々の避難所になりました。

大阪市内では大規模な空襲があり、国鉄環状線の内側は焼け野原になってしまいました。また、淀川に架けられていた長柄橋に向かって避難した方々が、一家全員亡くなっているところもありまし

た。姉は学徒動員され、軍需工場で働いていて、パラシュートなどを作っていました。姉の友人も空襲で亡くなりました。私は、男の子3人、女の子5人の8人兄弟の末っ子でした。長男と三男と長女は病死をしました。次男は兵士としてニューギニア戦線に派遣されました。

戦争が終わり、東大阪石切から帰った私は、逃げ回らなくても良いと思うと、本当にほっとしました。しかし、戦後の生活は苦境のどん底を極め、母がセルの着物と、お米などを物々交換で手に入っていました。食糧の買い出しは父と私で、伊勢にまで出向いていました。

終戦後、女学校の授業で校長先生が「今度の戦争がいかにも無謀であつたか、先生は深く反省しています。新しい憲法では戦争をしません。」と自戒を込めてお話をされました。クラスでは、父親や母親が亡くなった子どももいて泣いていました。その姿に、私たちはもらい泣きをしました。次兄が戦後1年程してニューギニアから帰ってきました。父は兄の顔を見て安心したのでしょうか、63歳で亡くなりました。その父は、生前ほとんど戦争の話はしませんでした。子どもたちに言えないくらい、よほど辛いことだったのだろうと、推察しています。

私は改めて、絶対に戦争をしてはいけないと思います。両親を失って戦争孤児になった子どもたちのことを思い、また防空壕の中で亡くなった人たちのことを思い、そして日常生活が潰されていっ

た怖さを思い出します。

今、日本の社会をみると、戦争が一瞬にして現れるのではないか。そういう不安を覚えます。平和憲法を守る運動を、しっかり行いたいと考えています。

10

「戦争のない平和な世界が訪れることを願います」

小比賀 千寿子（80歳）

1945年（昭和20年）8月15日、戦争が終った時、私は5歳でした。兵庫県城崎郡日高町（現在の豊岡市日高町）に実家がありました。私の住んでいた地域は、都会と違って直接的な戦争被害のようないことはありませんでした。実家は農家だったので、麦のいっぱい入ったご飯を食べていました。幼稚園に入園するのを楽しみにしていましたが、園舎には兵隊の荷物が入っているということで、入園はできませんでした。幼稚園のグラウンドはジャガイモ畑でした。私には幼稚園の思い出がありません。日高小学校入学後は、神戸の方からも転校生がいて、言葉づかいや服装等もの珍しく思っていました。

戦後1年くらいして、父が戦地である中国から帰って来ました。父の弟の叔父さんは戦死していました。子ども5人を育てるのに、叔母は大変苦労したと思います。両親は農業を営んでいました。猫

のひたい程の田畑でしたので、生活は苦しかったと記憶しています。家族は両親と姉2人、弟2人、私との7人家族でした。母が荷車に野菜を積んで、街に出かけて行きそれを売って現金に換えていました。子どもたちも時々母と一緒に、野菜売りのお手伝いをしていました。小学校の教科書は姉のお下がりを使用していました。子どもたちは栄養失調で痩せていました。すぐ上の姉は、中学校卒業後すぐ働きに出てしまいました。

お酒が大好きな父は、近くの商店に「するめを一枚買ってきて」とお金を渡し、子どもたちは交代で「するめ」を買いにいきました。それを焼いて私たち姉弟5人に分け、自分もそれを「肴のあて」にしながら、戦争の体験を話してくれました。中国の人達に、大変迷惑をかけたようなことを話していました。後で振り返ってみると、反省の言葉がなかったように思えて、軍国主義の恐ろしさを身にしみて感じました。その父も64歳で亡くなりました。

今世界を見れば、戦争で悲惨な目にあっている子どもたちや女性が、たくさんいます。一日も早く平和な世界が訪れるよう願ってやみません。

11

「和歌山空襲と家族の記録」

保ヶ渚 八重子（79歳）

私達は、和歌山市内で鉄工所を経営する父と母、男の子3人女の子4人の9人家族で暮らしていました。私は未だ幼く断片的な記憶ですが、空襲警報のサイレンの音、飛行機のゴーという音など怖くて暗い戦争のイメージが残っています。当時私達の家の前には、父が空襲時に逃げ込むように小さな防空壕が掘ってありました。警報が鳴ると皆頭巾を被っただけの姿で駆け込みました。空襲が未だ激しくない時等、次男で8歳の弘は、今でいうプラモデルのような工作飛行機作りに夢中で、幾ら呼んでも来ず姉に耳を引っ張られて初めて来る位で笑い合う程のんびりしていました。でもいよいよ空襲が激しくなり頻度も増すと状況は一変しました。暗い中を大きな荷物を持った老若男女が一斉に争うように避難所目差して叫び逃げ惑いました。空襲で私達の家が丸焼けになる最後の日、電気を消し真つ暗い中を母は荷物と2才の幸子を背負い、姉は私をおんぶして、皆夫々大きな荷物を持って爆撃音の中をお寺の方へ逃げました。焼夷弾の音、バンバンパチパチザー、物が焼ける音、匂い、悲鳴、怒号などが混ざり合い世界が割れるような音の中で、今でも耳を覆いたくなるのは、突然、老夫婦の「お前なんか死んでしまえ。」と互いに言い争う声が聞こえた時です。子供心にも、大変怖くて悲しい気持ちになりました。姉は、「八重ちゃんをおんぶして逃

げてると飛行機のゴーっという音がしたとたん、おんぶしている真後ろが見るみるうちに燃え上がって、あんたに火が飛び移ったかと燃えて死んだのかと母に「早よ見て〜！」と叫んだんよ。そしたら母がぐうぐう寝てるといったので笑うに笑えず、我に返ったら泣いてしまった。」と、よくその時の事を話してくれました。とにかくその様に、やっとの思いで避難先のお寺に着き、大勢がひしめく廊下で一晩疲れ切って眠りました。翌朝は又何キロも歩き海南へ着いたら又そこから親類が用意してくれた野上という田舎にへとへとになり乍らも辿り着きました。以前の家は丸焼けで跡かたもなくなくなっていました。私は近くの小学校に入り、次第に友達も出来少しずつ落ち着いてきました。でもまだ衛生状態も悪くシラミが沸いている子等がいて、皆運動場にならばされて頭から服の中まで真っ白い粉を吹きかけられ皆、全身粉だらけになり大笑いしたのですが、後にD.Tは有害という事で廃止になりました。その頃は食べる物もなく、バツヤや野草、おかゆ、ドジョウがいれば上等で皆やせていました。生活も苦しくその頃兄は17才位で満州開拓に参加したのですが、待っていたのは過酷な労働で知り合った友人3人着の身着のまま何とか日本に戻ってきたそうで、帰るなり夢破れて申し訳なく思ったのか「只今帰りました。」と母の前で両手を付き、赤土塗りのボロ服姿で報告したと、母は今亡きその子 pensando は何時も涙ぐんでいました。満州に行ったり、買い出しに行ったり、男の子ならではの働きをしてくれたのに、男の子3人が当時流行った腸チフスで1ヶ

月の間に次々と亡くなってしまったのです。母も高熱に侵されましたが、幸いに回復し残された女の子4人を守ってくれました。しかし、3人の男の子を同時に亡くし、悲嘆で気も変になる程だったと思います。亡くなった子等が綴った小さな手帳、変色し今では考えられない粗末な紙に、絵日記、考察記等、小さな字でビッシリ書かれている手帳を大事に残してあります。いろいろ話せば尽きませんが、苦労しながらも、しつかり者の次女が川西で美容院を開業し、母を中心に女性5人で頑張ってきました。私たちは戦争で、男の子3人を亡くした後も、もし生きていればと楽しく想像を巡らしたりもしましたが、同時に日本だけでなく世界にも大きな犠牲者が在る事を思うと戦争の限らない罪深さを感じます。

戦後75年の年月を生き抜いた日本人のドラマを見聞きするたび、今の平和の喜びと共に、涙があふれてなりません。私も昭和15年12月12日生まれでもうすぐ80才になりますが、ここまで何事もなく生きれたのも皆さんのお陰だと感謝感謝だと喜んでいきます。



「父は出兵、母子で戦火をくぐりぬけて」

青木 明美（80歳）

太平洋戦争が勃発した1941年、父に赤紙召集令状が届き、1歳の私に赤い靴を買ってはかせて、喜んでヨチヨチ歩いている姿を見ながら出兵していったと、戦後母が語ってくれました。父の父親は、息子が天王寺の部隊にいたると思つて、1週間毎日お弁当の差し入れを持つて門前に立っていましたでしたがすでに釜山に出兵しており、その父親も2年後息子に会えないまま病死しました。

1945年、母は大阪が空襲になると聞き、大慌てで大阪市此花区の家から手荷物をまとめ5歳の私を連れて、天保山の船に乗り込みました。疎開先は母の実家今治市。船は鈴なりに人々と荷物がごった返し、今にも沈みそうな気配に、恐怖心が沸き起こったのを記憶しています。

母の実家に着いて余り日が経っていない夜中、突然の警報にたたき起こされました。籐とうの乳母車に衣類と貴重品を山盛り乗せて、母の両親と4人で山の方向へ一目散に走りしました。何キロ走ったか分かりませんが親戚の家に荷物を置き、畑に掘つてある防空壕に飛び込みました。中には10人くらい居たでしょうか。

B 29の爆音がだんだん近づき、爆弾の破裂音やパチパチ燃える音がはつきり聞こえて、生きた気持ちがありませんでした。「あつ、入

り口が燃えている。みんな今のうちに出ろ！」と男の人の声。燃えている四角い入り口を、やっと一人ずつ這い出し、私は母と手をつないで、田の畦道に身を伏せました。この時、母の両親とはぐれてしまいました。母は急いで私をおんぶし、毛布をかぶつて、赤い空から雨の様に落ちてくる焼夷弾を避けながら、田んぼを這いまわりやっと道路にたどり着くと、両端は草がメラメラ燃えていました。

狂ったように、牛や馬が暴走し身の危険を感じました。人家は火の海、あたりは煙で見通しが悪く足の裏が熱いと思った時は裸足でした。田んぼの水で濡れた毛布を捨て、やっと山の際にたどり着き、横穴式の防空壕に入りました。中に8人くらいいて、私と似た年代の子も2人いました。

足元は水浸しで、みんな缶の上か、台の上に腰をかけていました。譲ってもらった台の上に、母と私は素足のまま腰をかけ、いつ終わるか分からない空襲が過ぎるのをじっと待ちました。夜が明けて、外に出て大丈夫のような雰囲気伝わわり、恐る恐る出ると、家が焼けた黒焦げの山や、あちこち火が燃え残っていたり、田や畑は、焼夷弾がいつぱい突き刺さっていて、あたりは別世界になっていました。お腹がすいていたので、親戚の家に行くと、半分焼けて幽霊屋敷のようになっていましたが、荷物は幸い無事でした。部屋の隅でおにぎりを食べていたら飛行機の音が近づいてくるのがわかり、逃げようかと立ったまま釘付けになり真っ青になりました。息をこらしていると爆音が頭上を通過し、音はだんだん小さくなって消えました。

ほっとしたとき「焼けた様子を偵察にきたんや」と親戚の人が言いました。

その後、夜になると、夜空の遠い方向であちらこちら薄赤色になって、空襲を受けているようでした。何日経ったか覚えていませんが、広島に大きな爆弾が落とされたと言われたと噂が広まりました。終戦後、半分焼け残った家に、4家族がしばらく住みました。母は着物、帯、貴金属を持って農家に行き、お米、味噌、醤油、食物にほとんど変えて、最後は着物数枚しか残っていなかったのが子ども心に焼き付いていました。

母は夫の無事を祈りながら、ひたすら「生きる」ことに必死だったと思います。戦後の食糧難は、言葉に言い表せない生活でした。かぼちゃ、芋、粟、麦、野菜の茎、外米を食べ、時々母が小麦粉で洋食焼きといって、塩や醤油で味付けした主食が美味しかったのを覚えています。配給の黒いパンは、つなぎにワラ？のようなものが入っており、半分食べて、こっそり捨てました。

父は、私が小学校入学の直前に、帰ってきました。激戦地ニューギニアへ衛生兵として出兵し、2千人部隊の生き残り5人の一人でした。戦地でマラリアに罹り、日本に帰っても東京の野戦病院に入院し、家族に連絡が取れるまで二年近くかかって、今治に私たちが住んでいることが判明しました。私は、いつまでも「知らないおじさん」と父を呼んでいましたが、美味しいビスケットをくれた味が父との距離を近づけました。弟や妹も生まれましたが、父はマラリア病

で年に何回となく40度の熱が出て、黄色のキニーネの薬を飲んでは何とかおさまりました。高熱が出るたびに、このまま死んでしまうのではないかといつも不安でした。

定職にもつけない、一時は生活保護を受けていた時もあり、戦前と戦後の余りにも変貌した生活に、母も投げやりな言葉を何度も言いました。私が小学校高学年になった時、戦地の様子を、父は「犠牲者が出たら、敵機がいても負傷した味方を助け、谷へ水を汲みに行っている間に、部隊が敵の攻撃を受けて全員死亡した。」「天皇陛下バンザイ」「お母さん」「お父さん」そして妻の名を呼んで死んでいた兵隊の話を、淡々と喋ってくれました。ニューギニアの夜空は、星に手が届きそうなくらいに澄み切って、南十字星が、何と綺麗だったことかと何回も言いました。「人の幸せを奪うのが戦争、人間を悪魔に変えてしまう戦争は、二度と起こしてはいけない。」と私に何度も言い聞かせました。戦地では肌身離さず持っていた私の幼い写真を見ては、生きて帰ると自分に言い聞かせたと言った時、私は胸がジーンと熱くなりました。

戦後45年、父は初めて私が住んでいた大阪府枚方市に来ることができ、昔住んでいた大阪市内の地域を案内したら、子どものようにはしゃいでいました。当時、民放テレビで「ニューギニアに散った16万の青春」と放映されていましたが、父は数少ない生き残り兵でした。その後、戦友同士で音信を頼って集まり、反戦の思いを込めた記録集として、「地獄を見た一兵士のニューギニア戦」を出版しま

した。文章の一部に、激しい腹痛に苦しんでいる一兵士に、応急処置として、父が外傷薬のリバーノールを飲ませて一命を取り止め、感謝の気持ちを綴った文章が載っていました。その父も、マラリア病からやっと解放されて70歳になった時、脳梗塞になり、認知症も出てきました。病院へ見舞に行った時は、「自分の父親がお弁当を持って、毎日天王寺の部隊の門前に来ていた。」と言って、一人息子だった父は泣いていました。

青春時代も人生も、戦争で破壊された父や母の一生を思うとき、21世紀は憲法9条を守り、日本と世界の平和が脅かされないよう、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを語る事が大事だと思います。

戦後、文部省が中学教科書として作った「新しい憲法のはなし」は2年ぐらいで廃刊。それを平和委員会がパンフレットにしたものを52年前手にして感動しました。数冊買い求め、友達や子どもや孫にも渡して話をしたものです。「9条があるから今まで戦争にならなかったのよ」と。

今戦争を知らない世代が増えている中、私は人生すべてをかけて積極的に語り継いでいかねばと思っています。

13

「辛い記憶だけが残っています」

辰巳 ふさ子（86歳）

私は、1933年兵庫県川辺郡西谷村（現在の宝塚市）で生まれ、18歳までそこに住んでいました。1945年の終戦時は12歳で、国民学校6年生でした。日常生活は勤労奉仕の毎日で、同学年の生徒全員が、午前10時から午後4時頃まで、深い山の中に分け入り、大人たちが木を切つて束にした薪を、背中に背負つて麓に下す作業に従事していました。子どもの身体にはかなりの重労働で、辛い作業でした。先生から、「この仕事は御国の戦争の銃後の守りですよ」と教えられていました。その間、教科書はありませんでしたので、勉強することは一切ありませんでした。当時、尼崎から集団疎開で50名くらいの子が来ていて、お寺で寝泊まりしていました。その子たちと一緒に勤労奉仕をしていました。先生は「みんな仲良くしてくださいね」と言っていました。お寺に帰るときは本当に寂しそうなのが可哀想で、自分は田舎に生まれて良かったな—と思いました。夜は灯火管制が敷かれており、空襲警報が鳴ると電気を消し素早く防空壕に逃げ込みました。ある昼下がりに突然、空襲警報が鳴り、低空飛行の機銃掃射がありました。急いで木の下に逃げました。逃げ遅れて即死した方を目の当たりにしました。大人も子どもも本当に怖い目に遭いました。一歩間違えれば私も命は無かっただろうと思います。

私が小学校4年生の時、15歳上の兄は出征しました。西谷村大原野神社で300名ほど集まり、兄のために出征兵士を送る会が催されました。みんなの気持ちを込めた千人針が手渡されました。出征後、ビルマから兄の手紙が届きました。手紙には検閲があつたそうで、苦しいことは書かれてなく、元気でやっていますとしたためられていました。

戦争が終つて、役場から兄が戦死したという紙切れ1枚が入った遺骨箱が送られてきました。母は仏壇にその箱をお供えしましたが、「この息子の命は何だったの」と泣き崩れていました。戦後農業に従事して生計をたてていました。そのかわら、母は箕(み)（穀物を選別するざる）を作ることが上手で、それで私たちの暮らしを支えてくれていました。

戦争はするべきものじゃありません。争い事は話し合いで解決したらいいと思います。戦争に勝ち負けはありません。

14

「日本国憲法は私の生涯の指針」

林 朝子（84歳）

私は1936年（昭和11年）5月、神戸市で出生。父は会社に勤め、専業主婦の母、3番目の子どもでした。国民学校に入学し、2年生の時、戦争が激しくなり、戦火を逃れて両親の故郷和歌山県

白浜町に、母と子ども合わせて5人で縁故疎開しました。父の本家で当主は伯父でした。本家の一部納屋を改造して住居としました。伯父は農機具を一切持たない私たちに、ききやかに耕作できる畑を準備してくれました。疎開先では食糧を生産できぬ都会人は、小さく生きていく辛い日々でした。

農村地帯にもB29をはじめ敵機が群をなして襲来し、轟音で地面が破裂する様な思いでした。警戒警報が鳴ると防空頭巾をかぶって一目散に逃げ、急いで帰宅し防空壕にもぐり込みました。その度に私は「誰が戦争をすると言ったの？ 子どもはこんなに辛い思いをしているのに……。大人になつたら戦争はイヤ！ と言える人になりたい。なるのだ。」と自分に言い聞かせていました。学校の授業は、音楽から体育まで全て戦意高揚でした。

1945年（昭和20年）8月15日昼頃、畦道を一人で歩いていると男児が「日本負けた」と。嘘だ、本当だの押し問答後、天皇陛下が放送をすると言う。負けたのなら敵機が来ない、逃げなくていいんだとホッとしました。

先生をはじめ大人の嘘が、一気に思い出されました。兵隊さんは最後の一人になつても敵と戦います。フラフラになつても戦います。講堂にある御真影はもう処分しました。お辞儀する必要はないです。価値観が大きく変わっていきました。

1946年（昭和21年）秋、父から神戸で家を確保できたという知らせに、家族全員小躍りして喜びました。旧制中学2年生だった

兄は、神戸で編入試験を受ける機会があるか否かで日夜悩んでいましたが、2年生終了まで母と兄が疎開地に残り、姉・私・妹3人が直ちに神戸に戻り父と4人で暮らすことにしました。翌1947年（昭和22年）新憲法が公布され、街の電柱のいたる所に旧憲法下の暮らしと新憲法下の暮らしの違いが、ポスターにして貼りだされていました。例として、お兄さんだけ、おかずが多くないですか？とか、特別に食事が変わっていませんか？ それは憲法違反です。もしそんなことがあれば、役所に知らせてください。

かつては戦意高揚のポスターや、村を挙げての満蒙開拓団の名のもと、満洲へ満洲へと移民促進の標語が貼りめぐらされていた電柱。こんなにも旧価値観が崩れていくとは。

「新憲法を皆さん誇りに思いなさい。素晴らしい憲法です。戦争を永久にしないということです。」29歳の青年教師は、熱っぽく上気して私達に語ってくださいました。52名のクラス全員、ワイッと歓声を上げて万歳をして喜びました。

皆それぞれ辛い思いをして、戦火を乗り越えてきたのだなーと思いました。11歳のときに聞いた素晴らしい憲法、永久に外国と戦争をしないと明記した日本国憲法。70年前のあの情景を、今でも鮮明に記憶しています。それが私の生涯の指針となりました。国民学校の名で入学しましたが、1947年（昭和22年）学制改革で国民学校から小学校へと名称が変わったのでした。

今日、戦争体験の生存者10%程度と聞きます。やがて0の時が

来るでしょう。次世代に戦争のリアリティを伝えるには、資料の保存の必要性は言うまでもなく、戦争の恐ろしさを次世代に語りつないでほしいと思います。

当時、農村といえども食糧が潤沢ではなかった。4人の子どもをかかえて30代だった母は、ずいぶん苦労しました。父は、家族と離れて実姉宅に身を寄せて暮らしました。

今、両親の事を思うと※あいせき哀惜きわまりないです。

※哀惜（人の死や失われたものに対して深く悲しみ惜しむこと）

15

「父の勝手な行動で命拾いをしました」

太田 正子（75歳）

高松大空襲の日の話です。その日は一番上の兄が盲腸の手術をして、市内の病院に入院していました。父は兵隊で高松空港の守りに就かされていましたが、非番で病院へ来ていました。大爆音と共にB29の大編隊から爆弾が霰の様に落ちて来たそうです。

病院の婦長から「全員が揃って一緒に逃げるので勝手な行動をしない様に。」と強く言われたそうですが、父は「そんな事を待っていたのでは死んでしまう。」と言って兄を抱き、母が生後1か月半の私を抱いて逃げたそうです。少し走り、父が後ろを振り向いた時は病

院や付近の建物はまったく見えず一面が火の海でした。その時の爆撃で高松市は80%余りが焼野原になりました。また2番目の兄は祖母と家の横にいと北の空(高松方面)が空一面、花火のナイアガラの様だったそうです。父が後ろを振り返った理由はいかにも父らしいものでした。それは新品の自転車を病院の入口に置いていたので未練があったそうです。

父は軍隊で身体を悪くし、戦後家の農業も余り手伝う事もなく横になっているか入院しているかでした。大正6年生まれ父が64歳まで生きましたが大変な医療費が必要でした。苦勞したのに母は「お父さんはバクチをした訳でもなく、女遊びをした訳でもない、戦争が悪い」と戦争や戦前の教育を鋭く非難していました。「高い空の上を音もなく、飛んでくるB 29に松ヤニの油や竹やり訓練でなくて勝てますか、子供でも判る事じゃ」と小さい頃は日本とアメリカの違い等々をよく話してくれました。

私も物忘れの多い年齢になりましたが母の話だけははっきりと思い出せます。戦争が無ければ母の苦勞もなかったのです。祖父の血を受け継いで共産党や色々な活動に熱心だった長兄も51歳で亡くなりました。その時の母の言葉です。「あの時B 29に殺されていたと思えば……今日まで生きていてくれてよかった。」でした。

余り知られていませんが特攻隊の訓練基地は香川県にもありました。今、その場所は宅間電波高から香川高専となり、若い人達が学んでいます。この若者達を戦場に送り出さない為にも「戦争反対、戦争絶対反対」これにつきまします。

16

「戦争は二度と起こしてはいけない 子供心に誓う」

中岡 正次 (83歳)

私は父の仕事の関係で1944年10月に大阪の阿倍野区から西成区に移り住みました。当時私は国民学校4年生で、馬力運搬業の馬の管理に雇われていました。年が明けて45年になると真夜中に警戒警報が鳴り、夜もおちおちと寝られない日が続くようになりました。

東京大空襲が3月10日にあり、大都市の名古屋・福岡と次は大阪と予測がついていたのか、12日の昼間に、近くの空き地にむしろやゴザを引いて一軒一坪ぐらいの面積で家財道具など布団や毛布を積みあげて出した。さて、真夜中が来て空襲警報が鳴り響き、表に出ると、真向いの畑をはさんで工業用の油脂を製造する会社が真つ赤な炎をあげ燃え盛っている。その炎はその後1ヶ月間昼夜消えなかった。灯火管制の引かれている時代にですよ。

父と隣りの小父^{おじ}さんは落ちてくる焼夷弾を拾い上げては防火用水で消化する。私たちは母親が1歳の赤子を背負い、5歳の妹と逃げ回ったが、行くところ行くところで火災に出会い、結局はぐるぐると熱い目と怖い目をしながら家に舞い戻った。馬舎には12、3頭の馬がいて、自分が使っている馬の避難に5、6人の馬子さんが連れ出してくれた。翌日空き地に出した家財道具を取りに行ったら、み

んな三方の熱気で灰になっていた。学校に様子を見に行ったが、コンクリートの3階建の校舎でしたが、半分は崩壊していて下から見上げて私の教室は助かったと喜びいさんで駆け上がったが、防火シャッターが降りていて、教室と共に私の教科書も全て焼き落ちていた。講堂には焼死体が所せましと並べられていた。

米軍は輸送機関である天王寺駅・大阪駅・造兵廠のあった森ノ宮駅・京橋駅・国鉄関西線の今宮駅には1トン爆弾も数発落とされ浪速区は全焼した。その今宮駅のそばを父が通りがかった時、帰ってこなかった馬が鳴いて知らせた。4月半ばのことです。馬子さんは焼夷弾が直接当たったのか行方知らずのままです。

堺の大空襲の時もひどかったです。死者がトラックで運ばれてきて、次から次へと山が連なるように築かれていく死屍臭が蔓延しかばねしていき、生き地獄に感じるように感じた。

戦争は二度と起こしてはいけないと子供心に植え付けられたのが、平和を守る取り組みを続けている一つの動機です。



17

「亡くなった妹は戦争の犠牲者」

永山 夫至子（82歳）

私は1938年（昭和13年）2月11日に、大阪市港区八幡屋宝町で生まれました。1944年（昭和19年）、国民小学校1年生です。登校すると先生が、昨日はお友達が二人亡くなったと、毎日報告です。私の家の庭には防空壕があり、空襲警報が鳴ると家族全員慌てて入り、縮こまっていました。入口にはB29が落とした焼夷弾の火の粉が大雨の様に降り注ぎ、生きた心地がしませんでした。またある時は、朝になって外に出てみると、電線に布団や毛布が引っかかっているのを見ました。恐ろしくなって飛んで帰りました。窓にはテープを貼り、カーテンは真っ黒にしました。

やがて国の強制で疎開することになりました。父の実家がある徳島に疎開しました。私たち姉弟は七人で、私は上からも下からも四番目です。上の姉と兄は（小学校5年生、小学校6年生）香川県のお寺に学童疎開していました。そこへ父が迎えに行きました。母は残った子どもたちを連れて、天保山から船に乗り徳島県海部郡牟岐町岳来に行きました。父の実家です。船は満員で階段に立ったまま、小学校2年生の兄が一歳の妹をおんぶし、母は2歳の弟を抱っこしていました。私は子どもながらに、兄が可哀想でたまりませんでした。

父の実家には少し世話になっていましたが、すぐ出ました。近く

の煙草農家さんの煙草の葉の乾燥室、広さは12畳ぐらい、囲炉裏を作って親子9人がしばらく住んでいました。そうして今度は馬小屋です。子どもながらにつくづく嫌になり、人間が住む家に住みたいと思い、とても悲しかったことを覚えています。その上まともな食事が食べられませんでした。

大きな釜に水をたっぷり入れ、米を少し入れてしゃぶしゃぶのお粥です。学校には弁当を持っていきませんでした。みんなが食べている時は、運動場で姉弟そろって遊んで、時間を潰していました。1945年(昭和20年)7月のある日、帰宅すると母が悲しい顔をして、妹が亡くなったと言いました。朝生きていたのに。ずっと体調が悪かったそうなんです。栄養失調でした。母はお乳が出ず、またミルクを買うお金ありませんでした。亡くなった2歳の妹は、戦争の犠牲者です。

私はこの戦争体験を書くことが辛くて、筆がすすみませんでした。本当は忘れてしまいたいのです。でも一方では、忘れては駄目だという心もあり悩みました。そして決心して書いたのがこの手記です。戦争は惨めで辛いものです。



18

「空が真っ黒になるほど、B 29 爆撃機が編隊で襲来」

山岡 幸子 (89歳)

私は愛媛県喜多郡大川村(現在の大洲市)出身で、現在89歳ですが、どこも悪くなく元気です。

昭和20年終戦当時、尋常高等小学校2年生でした。山に囲まれた田舎のほうでしたが、終戦5年程前から、B 29 爆撃戦闘機による爆撃に見舞われました。ひどいときには、一日おきぐらいに、50機から60機ぐらいで編隊を組んでやってきました。本当に空が真っ黒になり、怖い気持ちに襲われました。すり鉢のような地域の谷間に住んでいましたが、てっぺんの家がいくつも狙われました。バリバリという、耳をつんざくような轟音で爆撃されたのです。家は穴だらけで大変でした。戦争中は、村で何回もお葬式がありました。学校では、連日のように先生が指導して、竹やり訓練が行われました。藁人形をくくりつけて、それを先が尖った青竹で突くのです。今から考えるとばかげていますが、あの時は真剣でした。

終戦のその日、学校の先生に呼ばれて「さっちゃん、日本は戦争に負けたから、農作業用の用具を置いて、おうちに帰りなさい。」と告げられ、あたふたと帰宅した記憶が残っています。年上のいとこのご主人が戦死して、戦争未亡人になっていました。私の家族はみんな、畑や田んぼの農作業の手伝いをして、子ども4人を抱えたいとご家族の生活を手助けしました。

戦後の食糧難は深刻で、大洲市の街から、私たちが住んでいた田舎へ、食糧の買い出しに、わんさと街の人々がやってきました。みんな大きなリュックや袋を担いで、丸一日かけて歩いて来ていました。18歳年上の兄とは2年ほど連絡がとれず、不安な日々を過ごしました。怪我もせず帰ってきたのが、何よりの救いでした。戦争は何もいいことはありません。恐ろしいだけです。

19

「孫に語り伝える戦火のむなしさ」

川崎 進(84歳)

私は、29歳まで川西市栄根宗近で育った。現在の「すし半きと」、「小花モータープール」の道路を隔てた斜め向かいの「後北酒店」と「食糧事務所」があった辺りで、南隣5軒長屋でした。自宅前からは一面たんぼで、川西小学校の北校舎と講堂と福知山線(単線)踏切が見えていた。

1945年、川西(当時は町)においても戦争の状況は悪くなった。空襲警報が鳴り響くと長袖に防空ずきん、ゲートルを巻いて防空壕へ。夜は明かりが漏れないように電灯のかきに布をかける。そんな毎日が続いた。私は小学校2年生だった。

ある日、遠くの空に飛行機の編隊が見えた。それに向かって打ち上げ花火のようなものがさく裂しているが、飛行機には届いていなか

った。それが大阪大空襲だった。梅田のあたりは焼け野原になっていた。
こうかく

戦後、後学のためと父親に連れられて、梅田に出掛けた。阪急デパート前からは、一面焼け野原で難波方面まで一望できたのには驚いていた。残存建物は、ビルと蔵がポツンと残っていた。現在の阪神デパート裏側には、ヤミ市が多く出店。はじめて「豚まん」を買ってくれたが、中身の肉はなにか分からず、かぶりついていた。

当時、食料は配給制。母親達が集まり分配していた。配給米も米穀通帳範囲。主食は麦飯(匂いが嫌だった)米粒が数える程の中に、豆カス・さつまいも等を入れて量目合わせた麦飯。魚は脂の回った鯖・鰯の干物。食べるものがなくひもじい思いでした。

5人家族、配給食糧だけでは厳しく、父親は、母の着物を持ち出し、米と交換する食糧調達に日々自転車で奔走。ある日、父親がどこで入手したのか、進駐軍携帯食を数個持ち帰ってきた。銀紙に包まれたチョコレート。硬くて歯が立たず母親が、包丁で分割。兄弟が台所の隅でこっそりと食べていた。

物不足の時代に、初めてほろ苦い風味と香りを味わい食糧難の時代に珍しいものを味わせてくれた亡き父に感謝。現在では考えられない過酷な生活状況で、想いめぐると何となく郷愁を感じる。

「私の友人が陸軍士官学校受験当日に広島で原爆焼死」

鳥飼 國治（90歳）

終戦時、私は15歳の中学生でした。終戦直前、日本中の都市は、米軍の焼夷弾で焼き尽くされました。私の生まれは鳥取県の農村でしたので、戦災は免れましたが、戦争の被害は戦中も戦後も長く続きました。我が家では、長兄が戦死し、また大阪で被災した長姉が家族ぐるみで我が家に疎開してくるなど、色々な形で戦争の被害を受けました。

戦争中は、私は中学生でしたが、終戦まで軍需工場に動員されたり、農村工作隊として農村に動員されたりで、まともな授業は終戦直後からでした。戦争中は軍国主義一色でしたから、子どもはすべて軍国少年でした。中学校でも軍事訓練が頻繁に行われ、軍国教師が、特攻隊の養成の少年飛行学校への志願をすすめるなど様々な形で軍国主義教育が進められました。ですから憧れの上級学校は陸軍士官学校や海軍兵学校などでした。

私の友人は陸軍士官（経理）学校を広島で受験し、受験当日、原爆で焼死しました。広島長崎の原爆投下で日本は終戦を迎えましたが、終戦直後の一番の問題は、深刻な食糧難でした。戦時中配給制だった食料が、敗戦によって廃止されたため、都会の人々は、自分で食糧を求めざるを得なくなりました。食糧を求めて都会から

農村へ通うようになりました。衣料と食糧の物々交換が主流でした。そういう形で終戦後長い期間に渡って戦争の爪痕を残しました。

21

「ひっきりなしに『空襲警報』、

激しく銃弾が降り注いだ」

蔵所 悟（80歳）

終戦の昭和20年8月15日、私は5歳でした。当時大阪市東淀川区下新庄に住んでいました。生まれは門真で、1歳のとき養子縁組で養父母の下にやって来ました。

戦争の悲惨さですが、淀川右岸の柴島・淡路辺りまでも米軍の空襲がありました。とくに長柄大橋に激しく銃弾が降り注いだことや、今のJR吹田駅近くの旭通り商店街の空襲の被害を記憶しております。

私の住んでいた地区でも、ひっきりなしに「空襲警報」が出され、そのたびに昼夜を問わず、町内会指定の防空壕に避難しました。そして近くの田畑には、燃え尽きた焼夷弾が見受けられました。

この戦争で私の住居の地主さんが南方戦線で戦死されました。一方私の父は仕出し屋をやっていましたが、昭和18年召集され奈良の八連隊で訓練を受け、司厨兵として海軍に入隊、広島呉港か

ら出航、国外へ出る寸前終戦を迎えました。先に入隊された方々はたくさん戦死されましたが、幸いにも生きて帰って来ました。その間母と2人暮らしていましたが、親族はじめ周りの方々に助けていただきました。

もうひとつ私の記憶に残っているのは、母に連れられた阪急(当時新大阪)淡路駅のガード下での出来事です。出征兵士の為の「千人針」を願う婦人達の「武運を祈る」よりもむしろ「無事生きて帰って…」というあの哀しい表情を忘れることが出来ません。

戦争が終り国民学校に入学しました。ガリ版刷りのプリントの教科書でした。私が通学した「新庄小学校」は1クラス50〜60名で、ぎゅうぎゅうのすし詰め状態で、給食はバケツに入った脱脂粉乳が中心でした。

今私が強く思うことは、戦争というものは殺し合いをすることです。愚の骨頂、けしからんことです。生きている限り、微力ですが頑張りたいと思います。

22

「反戦の思いを若い人に託して」

比屋根 道子 (87歳)

神戸市大開町で1933年(昭和8年)に生まれました。今87歳です。ささやかですが私の戦争体験を語ります。小学校3年まで板

宿小学校で学びました。4年生から、大阪市の北大江小学校に転校しました。当時頻繁に空襲警報が鳴り、慌ただしい状況でした。

戦況が悪くなる一方で、そのため1944年(昭和19年)9月に、滋賀県蒲生郡島村のお寺に学童疎開をしました。6年生60名位と小学校の先生、お世話をするお姉さんたちが4か所のお寺に分散して生活を始めました。地元の島村小学校に通学しました。食料はよそと較べれば恵まれていたと思われれます。しかし育ち盛りの子どもたちにとって、充分ではありませんでした。

上級学校への受験がありましたので、翌年1945年(昭和20年)2月に大阪に戻りました。そして3月13日、深夜から早朝にかけての大阪大空襲に見舞われました。当時長屋のような家に父、母、姉、妹の5人が住んでいました。各家には小さな防空壕がありました。大阪大空襲の時、向かいの道路下に掘られていた大きめの防空壕に逃げ込みました。5歳上の姉と入っていたのですが、入り口から見えるB29の飛行機が、怖くて怖くて生きた心地がしませんでした。

B29の焼夷弾は花火のように燃えながら何メートルにもわたって落ちてきました。姉は足を痛めていた私をおぶって、少し離れたところにある京阪天満橋駅近くの広い空地に移りました。そこには何百人の方が避難していました。後になってわかったのですが、私の家は焼け落ちてしまい、辺りは焼け野原だったそうです。父は、家の敷地内の水のない古井戸に、布団や衣類や大事なものを投げ

入れて保管したそうです。大阪大空襲は、多くの方々に大きな被害を与えました。幸い私の家族はみな無事でした。

父は軍隊にいた時、上官から酷い仕打ちを受けたそうです。当番兵で作業をしていたら、言いがかりをつけられ、何回もビンタを張られました。私が「何で抵抗しなかったの。」と尋ねると、父は「軍隊では上官の命令は絶対的で、とても抵抗できるものではない」と言いました。

戦争中も大変でしたが、戦後数年間は食糧難で、配給も遅配や欠配（一か月分配給無し）がざらで、闇で買うしかありませんでした。あの頃父は、お茶の行商とか、家で饅頭やカリントまんじゅうのようなお茶菓子を作って売るとか、細々と家族のために働いていました。やはり姉だけの働きでは、祖母や1946年（昭和21年）に生まれた妹と7家族を食べさせていくのは大変なことだったのです。

私が思うに、もう一か月早く戦争を終らせていれば、原爆が落ちることもなく、ソ連の侵攻も無かったのではないかと心が痛みます。一たび核戦争が起これば人類は亡びます。若い人達が世界中の国々で平和を願う核戦争をなくす運動をしているのを知って、どんなにか心強く、地球上の人々にとって明るい希望を感じています。

23

「満蒙開拓青少年義勇軍に応募 終戦で懸命の逃避行」

中川 昭次（93歳）

川西市小戸の猪名川沿いにある桜並木は毎春見事な花を咲かせ、今では川西の桜の名所になっています。この桜の樹は地元小戸の30名ほどのフラワーメイトの人たちによって植えられ、大切に育てられて管理されているわけですが、その中心になって桜の樹を守っておられるのが中川さんです。毎日のように桜の樹の世話（施肥など）や樹の周りの花園の面倒を見ておられ、この影の力が毎年見事な花を咲かせているわけです。中川さんはこのように素晴らしい方ですが、実は大変な経験をされ、波乱万丈の人生を歩んでこられた方でもあります。以下にご本人からお聞きした話を基に年表形式でその歩みを追ってみたいと思います。

※中川さんの歩んできた道のり

- ・1927年（昭和2年）2月27日 中川昭次さん池田市木部で荒物・蒔蒔屋こたけやの長男として生まれる（2人の姉と1人の妹の4人）
- ・1932年（昭和7年）3月1日 満州国 建国宣言
- ・1933年（昭和8年）4月 池田 細河小学校に入学
- ・1936年（昭和11年）2・26事件により軍部の発言力が増大し、関東軍と陸軍省作成の「満州農業移民百万戸移住計画」が策定される。
- ・1937年（昭和12年）7月7日 日中全面戦争始まる

・1940年(昭和15年)4月 細河高等小学校2年時 的場好一訓導に説得され、※満蒙開拓青少年義勇軍に応募(補充兵として)。加藤完治が所長を務める茨城県内原町(水戸市)にある満蒙開拓青少年義勇軍訓練所で一ヶ月余りの訓練を受け、6月末に満州へ(神戸から船で大連へ、大連から満鉄で現地訓練所がある鉄驪に到着)

・1941年(昭和16年)12月8日 アジア太平洋戦争始まる

・1943年(昭和18年) 鉄驪で3年間の訓練(軍事訓練と開拓訓練)を受けた後、ソ連国境附近の黒河省・遜河・毛藍河(モウランホ)の大栄開拓団に配属される(大阪中隊230名の一員として。実際はほとんどが兵役に取られ100名ほどになつていった)

・1944年(昭和19年)10月10日 米軍沖繩を空襲 12月神風特攻隊 米艦に突撃大栄開拓団のほとんどの人が兵役に取られ、残ったのは10名のみ

・1945年(昭和20年)8月15日 天皇戦争終結の詔書を放送(終戦)

8月9日 ソ連がソ満国境を越えて進攻。関東軍は開拓民を置き去にして率先して逃亡する中、残された各地の開拓民(大栄、大黒河、大公河、三州)は合流し、後から加わった敗残兵などを加えて総勢200名余りで約1ヶ月間逃避行。中川さんの持っていた磁石を頼りに北安(ペイアン)を目指し人跡未踏の小興安嶺を超えて苦難の末に9月12日通北に至る。

途中、渡河中に水死、ソ連兵による射殺、敗残兵の手榴弾による自爆死、足手まといになる子供を親が殺すなどと言った悲惨な事件も。持って行った米などの食料は底をつき、連れて行った牛や馬を屠殺して食べたり、野生のブドウやキノコ、ハシバミの実などを食べて命をつないだそうです。尚、同行した大黒河開拓団の古賀氏の手記によれば、一緒に連れて行った満人(中国人)を「ソ連に通じる」として射殺したとの記述もあります。中川さんは通北に残っていた恵那郷開拓団に懇願され、翌年まで恵那郷開拓団と一緒に生活。

・1946年(昭和21年)9月 中国共産党の指示で通北から鶴岡炭鉱へ、各地から集られた一千人程の日本人と一緒に中国人に混じって7年間炭鉱で働く。

・1953年(昭和28年)帰国。鶴岡↓牡丹江↓奉天↓天津を経て塘沽(タンクー)から赤十字が手配した興安丸に乗船し8月25日に舞鶴港に、その際、中川さんは戦災孤児20名を連れて東京都足立区にある引揚者住宅に入る。当時、中国からの帰国者は共産党の烙印を押され、ともに就職できず、青森県の八

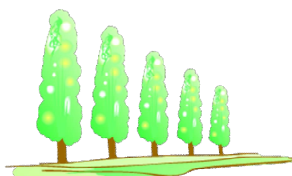
甲田山の麓、酸ヶ湯(すかゆ)温泉の近くの沼平にある開拓村(引揚者村)に移住する。

しかし、開拓村とは名ばかりで一面の竹藪でした。1年目は刈り取った笹で小屋を作り、2年目に県の補助で木材を使って自分達で共同住宅を建て、暮らしたとのこと。冬は4メートルの積雪で2階から出入りする生活でした。中川さんはこの地で牡丹江で出会った中国人に引き取られていた残留孤児の奥さんと結婚。

・1956年(昭和31年)青森での生活に見切りをつけた中川さんは奥さんと一緒に大阪に戻り、当初池田の中ノ島に居たお姉さんと一緒に暮らしたが、川西の萩原に移り、滝山にいた小父の下で植木について学ぶ。その後2年ほどして住友信託に嘱託として勤め始め小戸で暮らすようになったそうです。

(聞き手 紀川 清)

*満蒙開拓団の入植地の確保にあたっては既存の地元農民が開墾している農村や土地を「無人地帯」と指定し、地元農民を「集団部落」へ強制移住させるとともに、満州拓殖公社がこれら「無人地帯」を安価で強制的に買い上げ、日本人開拓移民を入植させる政策が行なわれた。およそ2000万ヘクタールの用地が収容され、買収価格は時価の1割から2割で、開拓民が入植した土地の6割はこうして地元の中国人が耕作していた土地を強制買収したものであった。(ウイキペディアの満蒙開拓団から)



「戦争が教えてくれたもの」

斉藤 美代子 (87歳)

1945年8月15日、私が小学校6年生の時、終戦しました。当時、三田市相野に疎開していました。ラジオから天皇陛下が悲しい声で敗戦、そして終戦を放送されました。

戦後、母は敗戦が悲しかったのか声を出して、泣いていました。

でも、私は爆弾やB29の低空を飛ぶ飛行機、そして電灯を風呂敷で包んで暗くする生活に恐怖におののいた日々から解放されて、うれし涙が出ました。

戦時中、小学校5年生の春、都会(十三)の小学校に通っていた私は、3つ年下の弟と、三田市相野の母の実家へ疎開することになりました。

平和な家庭から突然田舎の生活に移りました。汽車に乗って帰りたい線路を歩いて帰ろうと夜中に何度も思いました。母恋しです。転校した小学校になじめずに弟と2人で抱き合って淋しさを、まぎらわしていました。

でも2つ良いことがありました。私達(弟と私)を救ってくれたのが、同級生が、優しくお友達になってくれたことと、爆弾が飛んで来ない安心感でした。

反面、父母が無事かどうか、自分たちだけ安全な所に居て申し訳無い思いで涙が枕をぬらしていました。

疎開先で、困り果てている時の人の優しきは身にしみます。友が学校で仲間に入れて遊び時間や帰路にも話しかけてくれた優しさです。方言の違いも友達が出来ない原因でした。人への優しさを教えてもらいました。私もこんな優しい人になろうと戦争の中から勉強させてもらいました。

戦後、アメリカ人が日本に駐留することになり私の家の近くの大きな家屋に住むことになりました。アメリカ人はバター、バナナ等を私達の手の届かない物を食べていました。アメリカの男性は派手な日本の女を連れて得意気に、女を品物のように扱っていました。女性も食べていくには仕方なかったのです。子どもを産んでも父の責任も果たさないで女をもてあそんでいる姿を見て、私は女も立ち上がり、強くしっかり勉強して自立しなくてはと、子ども心に強く思いました。

戦争は絶対にはなりません。広島、長崎への原爆投下、許せません。

核無き平和な世界にと戦争体験を知っていただき、これからの輝く日々を祈ります。

「私の戦争体験談」

和泉 清（91歳）

私は15歳の旧制中学3年生山口県の下関市で終戦を迎えた。学徒動員で派遣されていた市外の或る金属精錬工場前庭で、昭和天皇のポツダム宣言受諾を告げるラジオ放送を涙ながらに聞いた。反面、その日以来、安眠を妨げる空襲警報、B 29の爆音から解放されて安堵を覚えたものである。

戦時中、中学生、女学生は、入学と同時に春秋の農繁期には勤労奉仕と称して、近郊農家へ田植えや麦、稲刈りに派遣された。3年生になると学徒動員令に基づいて、航空機製造など各種軍需工場出向を命じられた。勤労奉仕は短期間であったので、終われば学校に復帰出来たが、動員は週6日労働の連続であったので、授業は殆んど受けられなかった。

自宅は幸いにして焼夷弾爆撃を逃れたが、市内中心部はほぼ全焼した。以後、B 29爆撃機の狙ったのは機雷投下による関門海峡封鎖であった。朝鮮半島から本土への最短距離にある関門港には満州、朝鮮からの穀物の他、戦略物資が陸揚げされていた。アメリカの作戦は見事に成功し、以後、毎日の如く貨物船の触雷沈没が続いた。朝の工場出勤時、沈没船からと思われる乗員の死体が、海岸に漂着しているのを何度か目撃して、目を背けたものである。

同じ工場には旧制高等学校生も働いていたが、彼らは故郷を離

れての寮住まいであった。時に万年床のままの彼らの部屋に招かれ、年長先輩から大人の世界の片鱗をこっそり教わったものである。彼らの情報網はさすがであった。ある日、絶対口外するなど念を押された上「日本は、近いうちに負ける」と告げられた。「神州不滅、神風の襲来」を盲信していた軍国少年にとっては物凄いショックであった。

以下は、あるいは私の人生を変えたかもしれない体験談である。
（その1）当初は味方の対空砲火も戦闘機迎撃も激しかった。火を噴いて落下するB 29を軒下から眺めていたところ、突然、瓦半分の高射砲弾破片がビューンという音とともに足元に落下したのち大きくはねた。（注 6月～7月以降は、迎撃能力殆ど喪失）

（その2）農作業中のある朝、カタカタというプロペラ音を立てて小型機の急襲である。見上げると低空飛行の艦載機が地上射撃をしつつ、目前に迫っている。はつきりと搭乗員の姿が見えた。きっと相手は面白がつてか、一少年を標的にしたのだろう。

もしもである、高高度からの砲弾破片か、または、超至近距離よりの機銃弾の何れかが命中していたらと、思い出すと鳥肌が立つ。生きのびた余生は大切にしたいものだ。

最後に、「失敗の本質」（中央公論新社）が、第2次大戦敗戦の原因として、根拠なき楽観主義、不明確の目標、戦力の逐次投入を挙げていること、さらに、開戦前に或る特殊機関が行った研究では、「日本は緒戦の奇襲攻撃で勝利するが、国力の差から劣勢となり、敗戦に至る」との記録があることを付記しておきたい。

「満州からの引き揚げ」

福岡 通子（78歳）

私は、昭和18年9月に当時満州といわれた今の中国の通化で生まれました。父と母は長野県の人で、父は果樹農家の四男で、満州の営林省で働いていました。昭和19年、父は入隊することになりました。父と母は相談して、すぐに日本に帰ることに致しました。

この決心が私達の生きのびる大事なことでした。

母は私の兄と姉、私をつれて、なにもかもおいて日本に向かうと決めました。

家で働いていた満州の人に船に乗るところまで送ってもらい、港に着いた時はやれやれと、持っていた食料をその人に全部あげてしまいました。でも、その船は食べ物がなく全部自分達で持ってきた物だけで、まかなわないといけませんでした。他の人に分けてもらったり大変だったそうです。日本の港に着いた時は本当にうれしかったのですが、すぐに下船出来ず、2日間待たされたそうです。

やっと日本に上陸し汽車に乗り込み長野県松本市にむかいました。しかし汽車の中で母子はお腹が空いてすいて仕方なく途中の駅でおり、見しらぬとある農家に声をかけました。その農家のお嫁さんが、「では駅で待っていて下さいね」と言ってくれたので、親子4人、駅のベンチで待っていますと、その女の人がしばらくして来てくれました。手には包みを持って！それは大きな塩むすび3つでした。母

はとてもおいしく、子供達もとてもよろこんで食べさせてもらいすごうれしかったことを話してくれました。

そして、私達は、無事帰ることができました。

27

「“飢え”の思い出」

松本 篤弘（78歳）

昭和16（1941）年12月8日、日本軍のハワイ真珠湾攻撃で開戦、太平洋戦争に突入した。そんな戦下の昭和18年1月16日に私は豊中市岡町で生まれた。翌年の12月19日、大阪は最初の空襲を受けた。空襲警報を聞いたたびに、母は赤ん坊の私を背負い長兄と次兄の手を引いて近くの防空壕に飛び込んだ。母は途中で財布を落としていたことに気が付いたが、探しに行けないのでヤキモキした。父三郎は東京へ出稼ぎで留守がちであった。

戦局は悪化。父は思い余った末、一家を故郷の兵庫県神崎郡川辺村（現市川町）に疎開させた。姫路から播但線に乗り継ぎ約40分、列車内は疎開する乗客でデッキは鈴なりであった。田圃たんぼの中に農家が点在する。前方に中国山脈の支脈が穏やかに盛り上がり裏には市川が流れ、直ぐ後ろには播但線が通り、小高い山が迫っている。世話になる家は父の兄（私の伯父）が家長とする分家で決して裕福とは言えなかった。本家から分け与えられた田畑だけでは生

活が苦しかった。生野銀山から飾磨港まで銀鉱物を運搬する生野鉱山道(現312号線)沿いにあり、立地条件を考えて酒、煙草の販売を兼業とした。母は子供たちに自分のご飯を分け与えようとする
と、「※メンメの物はメンメが食いな！」と家長に叱咤され、居候の母は小さくなっていた。姫路は空襲にさらされ、空が真紅に染まった。

終戦のとき、私は3歳であつた。岡町の家は幸いにも空襲の被害が無かつた。一息つく暇もなく、戦後の厳しい生活が始まつた。「戦争犯罪容疑者」、「失業者対策」、「焦土日本」、「宴会禁止令」、「食料デモ」など新聞の見出しが示すように、戦争の後遺症が尾を引いた。父からの毎月の仕送りが途絶えるようになった。ひもじい思いに耐えられず、次兄にくっついて神社の椎の木に登り実を捕つて神主に叱られた。隣の遊び友達を誘つて屑鉄拾いに出かけ、ある程度集まると屑屋に売つた。真鍮しんちゆうだと鉄より値段が高かつた。30円ほど手に入ると2人で山分けし、お菓子を買つて空腹を満たした。外来種のアメリカザリガニも曾根の小川から捕つてきては私が料理をした。オスの腹に見られる青い血管には毒が含まれると聞き、削り取つてから油で炒めた。母は、和服を仕立てる内職をしていたが、栄養失調で、目が見えにくくなり、仕事は捗はかどらなかつた。私は、目の病に効くと言われたドジョウを母に食べさせたいと思い、服部緑地まで遠い道のりを歩いて行つた。5匹ほどを空き缶に入れて帰る途中、悪ガキにドジョウを盗まれ悔し涙を流した。母には心配をかけないようにそのことは話さなかつた。

以来、困難なことにぶつかつても、当時の苦しみを思い出しては奮い立たせている。

約70年経つたいま、コロナ下で、当時の私と同年代の子どもたちが、自由に課外活動が出来なくなっている。この辛い体験を将来に活かしてもらいたいと願っている。

※メンメとはこの辺りの方言で「自分」

28

「私の戦争体験」

空襲の始まり 新宮市にて(当時小学校六年生)

空襲警報あのサイレンにおびえた日

ランドセル背に 壕に飛び込みき

「B29 紀伊半島を北上中」

壕の穴より 怖々見上げき



友國 富貴 (87歳)

壕の戸の節穴に見上ぐる小さき空

轟音の敵機 次々とゆく

(これが大阪大空襲のB 29の編隊でした)

日の丸で出征兵士を駅頭に

汽笛と共に「万歳」忘れず

グラマンの超低空の機銃掃射

ねらはれし列車に 師の訃報きく

(三重県の田舎へ食料の買い出しに汽車に乗っていた前担任の先生が撃たれました。)

海藻も波飛沫あび食に採る

敵機襲来で 岩場の陰に

熊野灘は艦砲射撃あると言い

皆トンネルへと避難を急ぐ

迫りくる爆音机下に見上ぐれば

グラマン兵と目の合ひし恐怖

食糧難空襲警報防空壕

みんな痩せてた戦争中は

大阪は大空襲とのニュースあり

節穴に見しあのB 29か

スクリーンに見つむる出征軍歌なほ

今も歌へる私の哀しき

(映画一枚の葉書を観て)

汽車に乗り母と着物を米芋と

交換に行ったあの夏の日よ



北朝鮮 アナウンサーのそのままに

「戦争状態に入れり」と12月8日

メガホンの「空襲警報解除」という

その一声の明るき響き

親も子も壕出でたれば眩しげに

荷物両手に深呼吸せり

壕出ずに二人になったサツちゃん

半分に分けあいし干しいもの味

疎開地で 熊野本宮にて

炎天下手漕ぎの舟で幾時間

熊野川上流へ疎開した日よ

やぐら
きし
櫓の軋む音のみ耳に皆無口

敵機の襲来無きを祈りて

人と荷で身動きとれぬ幾時間

帽子傘等誰ひとり持たず

(B 29が飛んでくればかくれるところがない川の上です。びくびくしながらの船の上でした。小学生の泳げない私は、死を覚悟しました。)

逃れ来し熊野本宮静かなり

警報無き夜をぐつすり眠る

霧流る山あいの朝静かなり

鶯の声澄みて聞こゆる



玄米を一升びんに棒で突く

時間をかけて疎開地のこと

藁草履編んでもらうが嬉しくて

重き砧で藁を打った日

熊野川を手漕ぎの船で疎開せり

櫂を軋しませ本宮川上へ

頭たれ「耐へ難きを耐へ」に咽びある

大人の背に感じた不安

(終戦の日玉音放送に)

電燈の灯火管制の黒布はずし

終戦の夜の眩き明かり

正座してこの日に叔父はラジオ聞き

負けたのではない終わったと言いき

終戦すぐ裁判書類を焼却炉へ

煙にまみれし叔父を忘れず

終戦日疎開地に聞く蝉嵐

号泣ならむと子供心に

正座するラジオの前の大人見て

嗚咽する背に不安迫り来

疎開せし本宮小で早朝の

本宮大社へ戦勝マラソン

(8月14日迄)



終戦後

お金よりお米の方がと下宿代

戦後も引きずる学生時代

戦争の終わりにて空襲気にせずに

磯のばい貝見付けし喜び

黒板に戦後初めて先生の

大きく書いた「民主主義」の字

疎開地に別れを告げて帰りこば

飢しきながらも友らの笑顔

忘れ得ぬ戦後初なる授業での

今の気持ちを言はされしこと

「性別で差別されずに勉強の

出来る時代よ」と母は私に

(小6の時新憲法に)

八月がきて思い出す那智参道

ハーモニカ吹く傷痕軍人

空襲に「ちりきって逃げた」

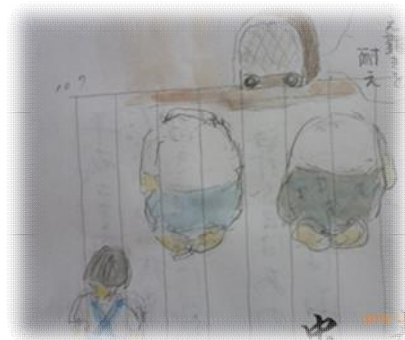
「おとろしかった」真剣に話す方言懐かし

グラマンかB29か爆音を

耳をふさぎて壕に聞き分け

飛び起きし空襲警報に真夜中の

壕で怯ゆる日の来ぬ事を



あの夏が又巡り来て蘇る

正座で聞きし「耐え難きを耐え」

(国民学校六年生)

出陣の絶筆読める悲しみに

「無言館出でて五月の空仰ぐ」

訳わからず墨塗らされし教科書の

何が何故かと思ひて塗りし

(終戦後直ぐ6年生の時)

玉音に大人の嗚咽忘りやろか

夏の巡りて蟬の哭く

29

「太平洋戦争の戦時下へ中学3年間へ」

白川 孝道 (92才)

当時は国民学校と呼ばれていた小学校。毎朝登校時に学校の門を入ると先ず奉安殿に最敬礼、次に二宮金次郎の銅像に礼をして、教室に入る。国民学校6年生の12月、英米に対し宣戦布告(1941年12月8日)太平洋戦争が勃発した。

1942(昭和17年)年、奈良県立郡山中学校入学、1学級50人4組編成であった。入学後、最初の行事は桃山御陵参拝。戦争に対する教育の基本を学ぶ。戦争は聖戦であり、日本は神国。戦争に負

けたことはない。大東亜共栄圏の盟主。各国の指導者たる自覚を持て！

1943(昭和18)年、中学2年英語は敵国語であり、授業短縮する。軍事教練が始まる。配属将校が2名常駐。1名は将校、1名は兵卒上がりの万年少尉でタタキ上げの軍人。通常の授業が終わりに近づく、自分の席でゲートル着用。先生も黙認。授業が終わるや否や一斉に運動場に整列、教練(2時間)を週3日行う。訓練中笑えば「口を開けろ」と命令され、砂を食わされる。月1回は野外行軍で模擬銃を肩に1日歩く。配属将校は自転車で同行、指揮。年2回夜間行軍訓練。早朝帰宅、朝食後再び学校へ。

冬には剣道の寒稽古。大寒入りから1週間、朝7時より約2時間。生物の時間には、学校の奥の広場で、馬鈴薯や甘藷の栽培をする。鶏の飼育、鶏料理の方法の実演。炭焼き竈で、炭を作る。収穫された作物、鶏肉、炭などは、教員が分けて持ち帰る。

路上で女学生と会話することは厳禁。特高警察が目を光らす。

中学1、2年生の夏秋は、小泉・斑鳩・平群各農家へ数日間出かけ、稲刈り、麦刈り奉仕。長谷寺町の裏山へ植林奉仕。作業は、きつかったが、林業家の家を出してくれる間食のサツマイモがおいしく、食事もご飯、腹一杯食べられ大満足であった。当時の街の何処でも見かけた標語は、「天皇陛下の御為にはいつでも笑って死ぬるんだ！」
「撃ちてしまえん！」
「鬼畜米英！」

中学3年生。

1944(昭和19)年7月15日、学徒勤労動員令発令、国鉄関

西線K駅を出発名古屋へ。動員された県立中学生、私立中学生も同乗しており、それぞれの軍需工場へ赴く。三菱電機名古屋製作所に勤務となり授業は停止され、教員は、監督者として同行した。製作所は、瀬戸電 大曾根駅に隣接していた。

宿泊施設は瀬戸電小幡駅の近く守山にあり、新築の寮、また陸軍練兵場の隣であった。寮では、1部屋12畳7人入居。休日は月2回。月1回が父兄面会日。起床6時。6時半に出発。寮から大曾根駅近くの工場まで約3km、朝は徒歩約40分、帰りは電車。工場到着後、担任の先生から指示、注意事項などあり、工場作業現場に向かう。月1回の合同朝礼で工場従業員、同じく動員された名古屋の高等女学校生徒と共に。工場内に数棟の棟があり、その大きさに驚く。

各自職場に出勤し、始業AM8時 終業PM4時。照準器の試作から始め、飛行機の部品など製造。各職場の指導員から作業の説明、指導を受ける。トイレなど職場を離れる時は、必ず報告。担任の先生が1日数回、状況チェックに巡回される。作業能力が向上するに従い、工場で使用する旋盤、フライス盤、ボール盤など工作機械の性能を理解、高性能製造機械は、すべてアメリカ製かドイツ製に気付く。日本製ではオシヤカになる。こんなことで戦争に勝てるのかしらと疑問をもつ。

寮の食事は、豆かす、大豆、コウリヤン入りのいずれかのご飯、大根入りの味噌汁、蔬菜一品。空腹でも辛抱。面会日の父兄差し入れ

でどうにかつなぐ。その蔬菜も暫くするとイナゴのフライばかりが、毎日出され、辛抱堪らず、そのイナゴを机に並べて「イナゴはイヤだ」と字を書く。

3か月後から夜勤始まる。1週間交代、始業PM7時 終業AM6時。代わりに往復とも電車通勤OKとなる。7月サイパン陥落後米軍爆撃機による本格的空襲始まる。11月24日、B29による東京大空襲、東京多摩中島製作所にB29、111機来襲のニュースあり。

守山寮の近くには、陸軍兵舎、練兵場、高射砲陣地があり、急いで寮の横の空き地に防空壕を作る。空襲は、日ごとに激しくなり、就寝中にサイレンで起こされ、一晩に数回防空壕に避難。数日経つと慣れてきて眠くて堪らず、発令されても部屋の押入れで寝込み、避難しない者が続出。

1944(昭和19)年12月13日、B29、80機による名古屋大空襲、名古屋市北部、三菱発動機爆撃される。当日は、夜勤明けで、寮で就寝していた。翌日の朝、出勤してみると、それまで毎日聞こえていた隣接する三菱発動機の試験稼働音が、ピタリと止んでいた。工場稼働停止の模様。その後、工場に派遣されていた奈良の中学生徒8人が犠牲と聞く。

1945(昭和20)年3月12日、名古屋市街地大空襲。焼夷弾による空襲止まらず休日の外出は、担任の先生の許可を得て許されていた。市内の歯医者に通院していたが、空襲3日後に行って駅を

降りると、焼夷弾による大空襲で一面焼け野原になっており、市内灰燼、一軒の家も見当たらず、戦争の悲惨さを、目の当たりに体験。1945（昭和20）年3月24日、B 29、130機による守山陸軍兵舎の空襲あり。幸いに寮の直撃は、なかったが、防空壕の中での地響き。頭上から土砂が崩れ落ち、爆裂音は、鼓膜が破れんばかりであった。正に紙一重で助かった。ただ同じ工場勤務で最近急遽徴用され、着任した一団の年配陸軍兵たちは、防空壕作りが間に合わず、地上に伏して避難。数名、爆弾の破片を受けて死亡。

三菱電機も大損害。毎日、後片付けに終始。新工場として4月中旬津川工場へ移転。

事態の深刻化に伴い父兄会が、学校に強く帰郷を要請。学校工場案が決定される。中津川工場では、作業準備まで行なったが、5月に10か月ぶりに帰郷。自宅から通学。学校工場設営のため、毎日、国鉄K駅近くのM電器工場から学校工場用の機材の運搬を始める。近くに柳本飛行場があり、度々敵機来襲。作業を中止して避難することしばしば。幸いに爆弾投下は、なかった。

一億総力戦、一億玉砕。市民の生活は、隣組の歌「トントンんからりつと隣組……助けられたり助けたり」にある通り隣組が基盤であった。隣組単位で焼夷弾の爆撃に備えてバケツリレーの訓練、また、米軍の本土上陸に備えて「竹槍戦術」の訓練が始まる。これでは戦争に勝てるわけではないと、口には出さないが、皆思っていた。

大本営発表では、日本は、いつも勝利していたのだが、現実にはアツ

ツ島、ガダルカナル島、サイパン陥落と玉砕の連続で、本土への空襲本格化していた。「京都、奈良の古代遺産は、どうなるのか」と心配する。関東・紀伊半島・沖縄九州の何れかへの上陸が、予想された。3月遂に米軍沖縄に上陸。神風特攻隊の活躍が報道された。6月沖縄戦敗北。本土決戦が現実のものとなった。湯川秀樹さんの新兵器「神風」を待つのみ！

原子爆弾、8月6日広島、8月9日長崎に投下。「高性能爆弾で空中爆発する。強い光を放つので、白いシーツを着用して避難せよ！」と報道。

1945（昭和20）年8月15日、ポツダム宣言受諾。太平洋戦争敗戦！終結。

学校再開。先ずは敵国語として2年間しか習わなかった英語の勉強を、1年生教科書から始める。

30

「苦難の時代」

山田 昌（91歳）

戦争を知る人も、だんだんと少なくなっていく。今、私も、九十一才になり、昭和十六年に小学校五年生だった事は忘れて行く様になり、今、心に残っている、あの恐ろしい戦時中の、最前線での兵士はもとより国に残っている国民も大変だった事は、戦争を知らない

若い人に少しでも知ってもらいたくて書きました。書いた以上にまだ大変でした。若い人にもこの平和が続く事を願って書きました。

今年で戦後七十六年、遠い過去となつて、終戦というのは、テレビでもよく言っていますが、知る人も多く、しかし始まったのは、昭和十六年十二月八日、当時私は、小学校五年生の時でした。

朝早くからラジオのあの勇ましいマーチと共に、「大本営発表：…」と云う放送に日本中が沸き上がりました。学校へ通う道では、人々が「日本は大勝利や」とさわいでいました。学校でも教室の黒板に、世界地図を出して、こんな大国と戦争を始めて大勝利と先生の説明がありました。

小学生の私には、なぜ戦争が始まったのか、わかりませんでした。

十二月八日は、※「大召奉戴日」^{たいしょうほうたいび}になり、小学校も全国すべてが国民学校と云う名に変わり、放課後に「ナギナタ」が入り、「エイ」、「ヤア」とやりました。毎月八日は地域の神社に集合して、みんなで必勝祈願をして、赤紙で招集されて出征する兵士の家では、背の高い「のぼり」が上がり、学校の運動場では、地域の兵士の見送りがあり、生徒も毎日の様に旗を振って、「我が大君に召されたる…」と云う歌詞の「出征兵士を送る歌」を唄って送りました。

だんだん、始まった時より世の中が変わり始めていき、戦地へ送る武器が不足しているので、「銅や鉄の少ない日本だから今度お寺の鐘が召集されることになり送り出しましょう」と言うようになり

ました。戦争に行く釣鐘の事を先生が言ったら、今の子ども達はきつと「ヘエ、お寺の鐘が出征やて…」と笑うでしょうが、その時は、誰一人笑う者はいませんでした。

運動場に、赤いタスキを掛けて大小の鐘が、すまし顔で座っていました。そしてみんなで「のぼる旭日の輝きに、たそがれなびく雲を越え、戦に進む釣鐘よ、広い世界へ鳴りひびけ」と唄いました。夕やみせまる道を、馬力（馬が引く荷車）にのせられて、ひづめの音と共に消えて行きました。夕やみせまる秋のもの淋しい日でした。

それから、「進め一億火の玉だ」と云うポスターがあちこちに貼られて、戦地の兵隊さんに銃後の守りは固い事を手紙に書いて送ったり、出征して人手の足りない農家に草引きに行ったり、何でもお国の為と云う事で変って行き、物資が不足して、主食や衣料品も配給制度にvarietyになりました。

店は閉めてしまう所が多く、少しでも開いていれば、人々は品をもとめて行列が出来て、お金では買えなくなつて、物々交換が始まりました。みつければ「やみ」をしただろうと云つて警察につれて行かれる始末、終戦までは言うに言えない事が、山積みありました。苦しい時代に生きた者の事を、忘れてほしくありません。十二月八日、八月十五日は、今一度、過去の事を思い出し反省の日になればと思います。若い人にはよくわからないかもしれませんが、どうにも出来ない苦難の時代もあった事を知ってほしくて書きました。

※大詔奉戴日とは、太平洋戦争（大東亜戦争）の開始とともに、国民の士気高揚と戦争完遂を目的として1942年（昭和17年）に設けられた国民運動で、毎月8日を指します。

31

「母の遺志を継ぐ父の戦没状況調査」

川口 正浩（83歳）

私は昭和13年（1938年）生まれで、所謂戦中派世代です。

父、市次は、昭和17年2月18日呉鎮守府第三特別陸戦隊員として呉港から出港したのだが、その直前の家族との面会が今生の別れとなった。

太平洋戦争末期の昭和20年7月3日、姫路市の2回目の空襲で被災して、母子3人（はな子32歳、正浩7歳、多恵子4歳）は神崎郡田原村（現・福崎町）へ疎開した。

母は、昭和22年4月から田原（現福崎）保健所へ奉職し、戦後の混乱期を乗り切り、2児の子育てを完遂して、昭和46年3月（59歳）、同保健所を退職した。その後、昭和46年5月から平成7年11月まで24年間、私たち夫婦（正浩、登美子）と現在地（向陽台）で同居した。

母は昭和51年4月、亡夫の33回忌法要を済ませた頃より、夫の最後の消息を求めてブーゲンビル島の生存者宛に芽づる式に手紙

を出す等していたが、思わしい情報は得られてはいなかった。

平成5年4月、念願の50回忌法要を済ませて「もう思い残すことは無い」と晴れやかな顔で言っていたが、その頃、新聞紙上で「ブーゲンビル島交友会」の存在を知り、亡夫の手掛かりを求めて、その例会へも参加するようになった。

平成7年11月14日、私が前月に受験していた「中小企業診断士試験」の合格発表があった。同日夜、母が「良かったね」と労いの言葉をかけてくれたのが、母との最後の会話になった。母は、生前ポツクリ寺に時々お参りしていたが、その通りの最後になった。

私は、母の遺品整理をしながら、ごく自然に母の遺志を継いで父の戦没状況調査をやろうと決意したものの、本格的に行動を開始したのは、母の死後、10数年後のことであった。

平成18年2月、「東部ニューギニア慰霊友好親善訪問団（日本遺族会主催）」に参加したが、その際は、治安上の理由でブーゲンビル島へは上陸できず、機上遙拝のみが行われた。

平成21年11月、「ビスマーク・ソロモン諸島慰霊巡拝事業（厚労省主催）」に参加した際、随同行の厚労省係官から海軍履歴原票による個人調査票の提供を受け、次の通り父の戦没状況の詳細が判明した。

・戦没地 ブーゲンビル島ブイン

・戦没日時 昭和19年5月1日 12時50分

・戦没状況 敵機来襲により退避中、直撃弾により負傷（前頭部

盲管爆弾破片創脳損傷)

次いで、平成24年5月、「山本長官機探索の旅」に参加して、初めて父の終焉地ブーゲンビル島南端のブインを訪れることが出来た。

戦史記録によると、昭和18年4月18日、前線を視察する山本五十六連合艦隊司令長官の搭乗機がブーゲンビル島ブインの上空で襲撃され、密林へ墜落したとなっている。(海軍甲事件)

我々一行は、まず墜落現場に現存する山本長官機に拝礼を済ませ、その翌日、父の駐屯地近くのブイン海岸で、当地で散華した父達4万人余の英霊の慰霊祭を執り行った。

かくして、3回のブーゲンビル島慰霊訪問により、父の戦没状況について正確な事実が判明し、何よりも父の70回忌法要を、その終焉地で執り行うことが出来て積年の思いが叶った。

32

「大阪第一次大空襲」

桐本 晨子 (88歳)

昭和二十年三月十三日、戦時の緊張の中、明日は小学校の卒業式。子ども心に楽しみにしていた。その日の夜も空襲があるかもわからない。すぐに逃げられる服装をして床についた。

夜九時頃、警戒警報のサイレンが鳴った。直様、空襲警報のサイレンに変わり、今迄聞いた事がない唸る様な響きが長く長く続いた。

いつもと何かが違うと直感した。頭巾をかぶり防空壕に走った。一時間経っても警報は解除にならない。だんだん不安が募ってきた。二時間ぐらい経った頃、轟々と物凄い上からの音。そして地上からの跳ね返りの地響き。壕の中で「今死ぬ今死ぬ」と隣の姉と固く固く手をつないでいた。壕の中では誰一人声を出さず九時間恐ろしい時間を過ごした。三月の壕の中は冷える。眠たい、喉が渇く、おなか为空いた、用を足したいの望みは一切思えなかった。編隊が頭上を通り過ぎると息を止めていた事に気付くのである。ホッとする間もなく、また編隊が頭上に飛んで来る。

やっと朝六時、警報解除のサイレンが鳴った。

「助かった。」

壕の戸を父が開けると真白な粘り気のある煙が壕の中に吸い込まれる様に入ってきた。庭の周りは煙でよく見えない。家が焼けていなかったのもホッとした。しかし庭越しの看護婦寮が焼けていた。外の空気はあらゆる物が焼けた匂いで喉が痛い、息が苦しい。足下は煙でよく見えない。よく見ると焼夷弾の外枠が落ちていた。恐ろしい思いをしながらも卒業式があればの想いが時々頭の中をかすめる。少し落ちついた頃、親に告げず学校に行ってみた。誰一人いない。少し待ってみたが人が来ないので遠まわりして友達の家へ寄ったが門柱だけが立っていた。昼前に黒い雨が降り庭は黒くヌルヌルで歩けない。雨が止み、空を見ると全体が灰色、太陽が薄い桃色で裸眼でばやけて見えた。これからどうなるのか暗然とした。

この第一次大空襲から八月十四日の第八次大空襲迄、五十数回の空襲があった。

暑い八月、壕の中はむせる。或る日、壕の中で聞いた事のない音が頭上から流れた。焼夷弾でなくまさか爆弾かと思った。その音は金属性でヒュルヒュルという音だ。近くに落ちたらしくユツサユツサと壕が揺れた。近鉄南大阪線一つの駅で線路が二本、二十米(m)くらい天を突いていた。近くの家は屋根が落ち家の中が見えた。また、阪和線の一つ目の駅で石垣が崩れていた。

三度目の爆弾は原子爆弾の模擬爆弾であった。見当つけて三キロ位を猛暑の中、見に行った。大きな大きな深い^{すりばち}播鉢型の穴が空いていた。周囲の家は跡形もなく恐ろしい惨状であった。帰りはショックで足は重く喉はカラカラであった。

33

「戦争の思い出」

河村 田鶴子 (80歳)

1941年、私は、岐阜県の田舎に生まれました。家の裏の水屋と呼ばれる所に、横長で奥深い防空壕が作られ、その中には、茶碗や皿、^{やかん}薬罐等炊事道具一式も入れてありました。家の中の欄間には、夜になって家の中の明かりが外に漏れない様に暗幕がはられ、電燈には黒い布が被せてありました。空襲警報の合図のサイレンが鳴る

と急いで電燈を消し家族全員が一カ所に集まり息を止めて、B 29 が家の真上を通過して行くのを待ったり、防空頭巾を被り防空壕に逃げたりの繰り返しでした。

ある日、昼間防空壕に逃げていた時、「ゴー」とものすごい音をたて、何機ものB 29 が防空壕の真上を通過きった時、当時4才であった私は、B 29 を見たさに、白い下着のまま外に飛び出し「あつB 29 や。」大声で呼んだ瞬間、祖母に「上から姿が見えて爆弾を落されたらどうするの。」と強く叱られました。防空壕の中では、赤ん坊の弟が「オギャー」「オギャー」と泣き出し、声を出させまいと必死に母乳を与えていた母の姿が、今でも鮮明に残っています。

家には、名古屋から親戚の女の子が疎開してきておりました。その名古屋に焼夷弾が落ち、家族は無事でしたが、家は丸焼けになりました。その日の名古屋方面の東の空はまっ赤に染まり、子どもの私達は※^{はさ}稲架竹に登りまっ赤に染まった空を見ていましたが、どんな赤い炎が迫って来る様で、とても怖かった事を覚えています。又、登園の途中で警報の知らせのサイレンが鳴れば、近くの麦畑に逃げ、B 29 が通過して行くまで、背を低くして隠れていた事は何回もありました。

又近所で、出征される兵隊さんが見えた時は、皆、神社に集まり軍歌を歌いながら、日の丸の旗をふりお見送りしました。

この頃の食生活は貧しく、米、砂糖、塩をはじめ、すべて配給制でした。鯨の肉の配給もありました。生きて行くのに必死で泥棒も増

え、家ではかめの中に貯蔵されていた砂糖をそのままかめごと盗まれたり、月夜の晩に、リヤカーも盗まれました。衛生面も悪く、小学校に入学したら、全員にシラミ退治の※DDTを頭に散布され、白い頭で家に帰った事もありました。

女の子の遊びの中に、まりつきがありました。その中に「日本勝った」「日本勝った」「ロシア負けた」「ロシアでも降参すれば良いじゃないか」。これらを歌いながら、まりをつくのです。お姉さん達から教わりましたが、誰が考えたのかは解りません。

終戦の日の8月15日は、家族全員がラジオの前に正座して、天皇陛下のお言葉も聞きました。

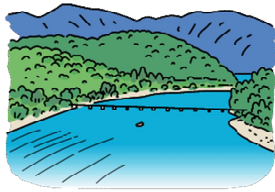
当時大活躍してくれました防空壕も、今では入り口が塞がれ何事も無かったように、金柑、無花果が植えられ、間からはつくし、せり、露が生え、のんびりした風景に変わっています。

防空壕で「オギヤア」「オギヤア」と泣いていた赤ん坊も76才になり、医者として今では、コロナ患者さんのお役に立っているのだと思っています。

田舎に住んでいましたので、大空襲にも合わず被害も少なくてすみましたが私達ですが、戦争で大切なご家族を亡くされた方々には、大変お気の毒に思います。

※稲架竹とは、稲刈り後に稲を干すための台

※DDTとは、戦後、腸チフス（シラミが媒介）の撲滅のため、身体にかけていた有機塩素系の殺虫剤・農薬。日本では1971年（昭和46年）に農薬登録が失効した。



34

「耐えがたきを耐えた時代を語り継ぐ」

西 百合（91才）

過去の戦争体験談を次世代の皆さん達に語り告げられるのは、大正、昭和一桁生まれの世代である。

昭和十八年十二月八日。

日本国の方からアメリカ国の真珠湾を攻撃して太平洋戦争が勃発した。

それ以来、アメリカの軍事力が強くて日本の統治下であった南方の島々、サイパン島、ガダルカナル島、パラオ諸島、マレーシア諸島、ミクロネシア諸島へ、大勢の日本兵が派遣されている所を、アメリカ軍に爆撃されて物資の補給が断たれて、大勢の兵士たちが餓死したり玉砕したりして、遺骨すら帰らない悲惨極まりない状況となった。戦争未経験者達にはわからない。戦争は絶対してはいけない事を肝に命じてください。

令和三年八月十五日で、太平洋戦争敗戦から七十六年になる。軍国主義の教育は、今の時代では考えられない。お国の為なら命を惜しまない義務教育を卒業した若者達が、特攻隊へ志願して命を落とす。教育で洗脳されると言うことは怖いですね。

昭和十九年末ごろから、南方の島々から本土に向って攻めてくるので、沖縄諸島や奄美諸島の島民達は、本土に縁故のいる人は疎

開きなさいとの国からの指示があつて、疎開する人たちを運ぶ客船を軍艦二隻で護衛して本土広島の呉港まで送り届けてくれた。

昭和十九年八月二十二日、戦火を逃れる為に沖縄から長崎へ疎開する学童たちを運ぶ対馬丸が、鹿児島県の悪石島沖でアメリカ軍の潜水艦から魚雷を受けて撃沈して、千五百人の学童たちが尊い命を奪われた。

それ以後まもなく沖縄上陸して沖縄戦が始まり島民たちが殺され自殺したりして、戦争と言うのは目の前での殺し合いですから、残酷極まりない体験をした人達は、生涯脳裏に焼き付いて忘れる事は出来ません。戦争は絶対してはいけません。

戦時中は、食べる物や着る物がない。各家庭にある金属類は国から没収されて、「欲しがりません勝つまでは」の合言葉で毎日を過ごして来た。

義務教育を卒業したら、当時植民地であつた満州国へ開拓義勇軍として派遣されて、食料増産するのに荒地を耕して農作物を植える。

本土では軍事工場で軍用品を製作するのに働かされた。

昭和二十年はじめごろから、アメリカ軍の航空母艦が紀伊半島沖から爆撃機B 29が神戸や大阪上空へ襲来して、軍事工場や住宅街などへ爆撃や焼夷弾を投下して火の海。人々は殺され、其の辺、焼け野原。

八月六日、広島原爆投下され、八月九日、長崎原爆投下された。

昭和二十年八月十五日、終戦を宣言した。

当時の事を今になってふりかえって考えれば、厳しい時代の移り変りを体験してきた良い人生だったと思っています。

軍国主義の時代は男尊女卑で、女性はつらかった。

戦争に負けて手のひら返したように時代は変つて、男女同権、人権を尊重する、差別のない時代になつてよかつたと思っています。現在は平和で、贅沢三昧の世の中。戦時中は、耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、の日々を過ごして来た。平和の有難さを痛切に感じて嬉しく思っています。

35

「希求」

加茂 義光（63才）

コロナ禍で日常生活が大きく変わり、生命が危機に晒さらされた日々を振り返って、改めて生命の尊さを見つめる機会になつた。父から聞き取ったことを中心に書いてみたい。

父は1925年（大正14年）生まれ。1943年（昭和18年）に志願兵として18歳で召集され静岡連隊から出兵し、旧満州、沖縄、石垣島と転戦した。石垣島では飛行場造りの任務に就いていたが、戦況は劣勢で応援の兵隊や弾薬、食糧、衣服などが既に届かなくなっていた。

米軍の攻撃が日増しに激しくなり1トン爆弾が次々と上空から投下され、地面に着弾すると耳をつんぎく炸裂音と同時に爆風で土砂が吹っ飛び、大きな穴があちこちに空いて造成中の滑走路は跡形もなく破壊された。さらにごう音とともに飛来した百機を越す戦闘機から機銃掃射の波状攻撃に狙われた。容赦のない乱射が続いた時だった。銃撃から逃れ地面に伏せていた横の兵隊の胸に銃弾が貫通し「うーん」と数分唸ったあと兵隊の息が途絶えた。

海岸の壕に設営された野戦病院には多くの負傷兵が運び込まれていたが、そこでの十分な手当てが受けられず、苦しみながら亡くなった戦友を父が見送ることになった。屍衛兵の任務として亡くなった戦友の焼ける煙と灰をかぶりながら一晩中歩哨に立つて茶毘に付したが、「その戦友たちとご遺族の事を想うと、無念で居たたまれなかった」と悔やんでいた。

勝算の目途もなく、いつ終わるとも分からないまま、若者たちは命を懸けて最前線で戦い続けた。

父たちの小隊に敗戦が知らされたのは、9月になってからであった。敗戦後も栄養失調や負傷した戦友たちが相次いで亡くなり、生還を誓い合っていた若者たちの未来は夢とともに儚く消えた。

出兵時66キロだった父の体重は44キロになっていた。

病院船で引き揚げることになり、石垣島を発ち広島に上陸後列車で大阪に到着。梅田から阪急電車の最終電車で川西の生家に帰還したのは、敗戦の年の12月30日であった。

途中で見た広島は、原爆投下後4ヶ月余りが過ぎていたが、被爆したその焼け跡は大地が焦土と化し、「攻撃で破壊されたこれまでの戦場とは比べようもないやられ方で、あたり一面焼け野原、見渡してもほとんど建物は残っていないかった」とその時の惨状を昨日の事のように話していた時の父の口振りが忘れられない。

「川西の方の家は残っていますか？」と梅田駅で駅員に尋ねると、「大阪、神戸は大空襲で多くの人が亡くなられ建物も消失しましたが、北摂の方は助かっているかもしれません。」と。果たして家族や生家は無事なのか気が気でなかった。逸る気持ちを抑えきれず、川西に着くまで座席には座れなかったと振り返っていた。

痩せてボロボロの身体を引きずるようにして生家にたどりついた時は真夜中で、すでに寝ついていた祖母(父の母)を枕元まで近寄ってゆすり起こした。祖母が、軍服姿の父の身体を上から下へとさすりながら「足ついているか？」と問いかけると、「はい、ついています」と父は応えた。

消防団の年末夜警にあたっていた祖父(父の父)が呼び戻され父の姿を見るなり、「沖繩の報せばかり届いていたので、もうおまえの命はないものと思っていたのに、よう生きて還ってきた。疲れとるやろ、2階に上がってゆっくり休んだらええ、話すことはこれから先いくらでもできるわ」と優しく言ってくれた。それっきり寝込んだ父は2年の養生生活を送ることになった。

「石垣島 百機に余る戦闘機 機銃掃射に逃れしわが生命」

「星空の下 戦友の屍焼きし我 無念の別れ老いてなと思う」

「床に伏し 長き2年も愚痴言わず 復員の我に世話どりの父母」

この短歌は父の晩年の遺作である。

壮絶で生々しい戦争体験を聴き取ったのは、父が亡くなる数年前であった。

父は従軍中に高熱に冒され、その後遺症で30歳頃から視力が低下しはじめ、50歳を過ぎた頃には全く見えなくなっていた。戦禍は私たちの生活に大きな影響を及ぼした。

銃弾の中を潜り抜け九死に一生を得た命は、戦中、戦後と激動の時代を生き抜いたが、秋冷の朝、自宅の仏間で誰にも看取られず両親の元へと旅立ち、64歳の天寿を全うした。予期しなかった突然の別れとなり、聴いておきたかったことが聴けずじまいになったことを後悔している。

軍隊仕込みの厳しさと荒々しさを持ち合わせていた父は、自身にも家族にも厳しかった。そんな父が晩年は好々爺こうこうやになつて相好そこうを崩し初孫を抱いていたが、その様子を微笑ましく眺めていたのは束の間のことだった。

父とともに生きた30年間を財産として、これからの生き方に活かしていきたい。

戦争を遠い過去のことと風化させてはならない。無惨な最期を

遂げた戦死者とそのご遺族の憤怒ふんぬの上に今の平和がある。

人は、人を殺すために、人に殺されるために生まれてきたのではない。この世に生を受け、生まれてきてよかったと誰もが思えるように何が出来るか考え行動したい。

そして二度と戦争をしないこと。今ある平和を子や孫に繋いでいく責任が私たちにあると痛感している。この平和な時代がいつまでも続いていくことを願ってやまない。

36

「戦争と私」

岡崎 美知子（84才）

昭和十二年に生まれた私は、戦争中の昭和十九年に小学一年生になり、当時住んでいた京都の下鴨小学校に、四年生の兄と元気に通学していました。授業中に空襲警報のサイレンが鳴ると、教室の床の下に作られた防空壕に入ることがよくありました。

そんな生活の中、当時三十七才の父が出征して、しばらくして二度と家族のところに帰らず、ニューギニアで戦死しました。私が父と過した生活は、七年間で終わってしまいました。

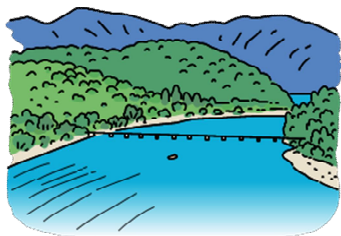
父が戦死してから、生活の場を丹後にある父の実家に移しました。戦争の影響があまりなかったため、二人の叔母といとこ達が疎開してきたため、大変にぎやかな生活になりました。終戦になり叔

母たちが自宅に帰ったので、祖母と母と五人の子ども達の生活になり、私は高校まで丹後で過ごしました。近くの山や川に友達と遊びに行ったり、庭にできる柿やいちじくをよく食べた事が、とてもなつかしいです。

二人の叔母も亡くなり、若くて未亡人になり、苦勞して五人の子どもを育てた母も、二十四年前に八十二才で父の元に旅立ちました。

母の年令を越した私は、子ども二人と孫六人、ひ孫一人に恵まれ、夫と老後を過ごしています。

戦争のない平和な世の中であることを、いつも思っています。



37

「五歳が見た戦中・戦後」

新田 紀久子（82歳）

物心がついたころは戦争中だった。防空頭巾はいつも手元にあり、夜も枕元に置いていた。サイレンの音や「空襲警報発令」の声にすばやくかぶり母に手を引かれて、近くの防空壕に逃げた。父は病弱だったのと、仕事の関係で戦地には行っていなかったが留守がちだった。あるとき、逃げ遅れて、一人家の中に残され、神棚の下で耳をふさいで震えていたことをはつきりと覚えている。空襲が激しくなり毎日のようにサイレンが鳴り、飛行機の音がひっきりなしに聞こえた。当時住んでいた西宮には海軍用の航空機を急造していた川西航空機の工場があった。父はいつかそこが爆撃されるだろうと予測したのか、自分たちの実家がある田舎に、姉と私をあずけたのである。それ以降空襲の恐ろしきは知らなかったが、両親や姉妹と離れ、一人で心細く、とてもさびしかった。そんな私を祖母はいつもぎゅっと抱きしめてくれた。

私が、戦争は二度と嫌だとの思いを強くしたのは、終戦後である。食糧難や物不足で混乱していた。西宮の家は焼けずにすんだが、焼け跡が点在し、街は薄暗い感じだった。

休みになると父は姉と私を連れて田舎へ行った。そのころ、高松

へ行くには宇野港(岡山県)から連絡船に乗っていった。列車が宇野港に着くと父は私の手を握り姉に向かって「走るぞ」と、言って走り出した。私は父の手をしっかりと握り必死に走った。周りの人々も皆走っていた。船はぎゅうぎゅうで体を動かすのもやっとだった。

帰りはほとんどの人が大きな荷物を抱えていた。姉と私の背中には小さなりユツクがはちきれそうに膨らんでいた。お米が入っていたのである。棍棒こんぼうを持った警察官が人々を縫うようにして、歩きまわっていた。そして誰かれなく捕まえては荷物を取り上げていた。荷物を取られた人は必死になって取り返そうともみ合っていた。警察官は棍棒を振り上げ、打ち据えていた。恐ろしくて父にしがみついていた。そんな光景を何度見たことか。そのことからしばらくは警察官を大嫌いになった。

国民学校に入学した最後の年代で、2年生からは小学校になった。教科書もわら半紙を折った物から、絵が入って少し奇麗になった。文字もカタカナからひらがなに変わった。

学校では子どもどうしで、よく戦争の話をした。ある子は「西宮の浜には死んだ人たちがごろごろしていた。そんな人たちを踏んだり、またいだりして逃げた。そのことを思い出すと怖くて時々夢に見る」と言っていた。小学校時代の友人には戦争で父親を亡くした人が多かった。

38

「はじめて見た故郷日本」

大林 芙美 (83歳)

はつきり覚えていないが、忘れてくても忘れられない、この年になつても頭にこびりついていることを書き記しておきたかった。

北満(中国東北部)の郷土チチハルで生まれた私は、「宮前在満国民学校」に入学したが、勉強するまでもなく、終戦となった。

間もなくしてロシア人(ソ連軍)が土足で家に上って来た。私はまだ小さかったので逃れられたが、おとなたちは悲惨なものだったらしい。

それから引き上げ者となり、小さいながらランドセルに自分のいるものを詰め、屋根のない貨物列車に乗り何日もゆられた。途中トイレは列車が止まっている間にその下で用をたした。この車中、まともな食事をした覚えがない。

断片的に思い出すのは、暗いギシギシという二段ベッドの上、母も父も兄も姉も誰もいない、まわりには知らない人ばかり、何で一人なんだろうと思ひ、良く聞くと伝染病になっていたみたいだった。真暗な広い部屋に隔離された病人だけがまわりに寝ていた。親も誰もいない。その時、「※支那人」の子になるのだと思った。何もわからず隔離がとけて病院から出てきた時、父母兄弟みんな一行に遅れて待つてくれた。その時は、夢のような気持だった。

再び貨物列車に乗り、動き出したと思ったら、「頭を下げ！ 頭

を出すな！」と叫ぶ声とともに、「ドーンドーン」と鉄砲の音がすると、列車は止った。すぐに列車を降り、母は弟をおんぶして6歳の私は必死でついていった。先の見えない荒原を何キロ歩いたことか。やがて港の貨物船が見えた。その後、息苦しい船底で何日過ごしたことか。ある時、船内にサイレンが鳴り、手を合わせるように言われた。幼いながらも誰かが亡くなったのだなあと思った。そんなことがあっても、もう歩かなくて済むんだという思いの方が勝っていた。

明方、「甲板に上れ」と言われ上に行くとは、緑の山々や段々畑、生れて初めてみる景色が眼前に広がっていた。幼いながらも、これが内地(日本のこと)かと思った。あの景色は今も脳裏に焼付いている。

※中国人の蔑称・差別語。原文を尊重しそのまま掲載しています。



39

「うばわれた小さな命」

植田 康子 (83歳)

1945年8月15日は敗戦記念日、あれから77年になります。私は、そのころ満州といていた中国の東北部・大連で生まれました。

当時6歳、国民学校(小学校)の1年生でした。とはいっても入学式に出ただけで学校は一度も行けませんでした。大連の街にも空襲があつたのです。爆弾の落ちた大きな穴を見ました。敗戦間近のころには、父を残し屋根のない貨車で、朝鮮との国境の田舎へ疎開しました。

大連は、ロシア人の造つたアカシア並木の美しい港町で、日本へ一番近い街でした。敗戦の時、私の家族は幸いなことに皆そろっていました。ソ連へ連行されるところを間一髪、逃げ出した父40歳。30歳の母、8歳の兄、6歳の私、4歳の弟、2歳の妹の6人家族です。敗戦の報と同時に、中国の人々が私たちの物を盗ったり、家の略奪を始めました。国の後ろ盾を失った日本人は、命や財産を失いました。当時の日本政府は「居留民はできうる限り現地に定着の方針を取る」と発表したと後で知りました。私たちは国に見捨てられ、難民になっていたのです。

それから1年後、やっと日本に引き揚げることになりました。父のリュックと兄の小さなリュックとわずかなお金が家族の全財産で

した。母は赤ちゃんの妹泰子を背負い私の手を引いて、コロ島（中国遼寧省）から貨物船に乗り、長崎県佐世保港へ向かうことになりました。

船底にはたくさんの人がひしめきあっていました。毎日、コーリヤン（*中国東北部などで多く栽培されるモロコシの一種）のおかゆを食べました。母のお乳は出なくなり、妹のかわいい笑顔が見られなくなりました。ふつうなら4日ほどで着くのですが、燃料がないのか結局、佐世保上陸までに1か月以上かかりました。

日本の島影が見えるのに沖合で待つのです。夏の暑い日で、船底は暑くてたまりません。船からおろした錨いかりの鎖を伝って海で泳いでいたおじさんがおぼれて亡くなるという騒ぎもありました。大人たちは「やつと苦勞して日本まで帰ってきたのに」と気の毒がついていました。

ようやく上陸しましたが、今度は引揚者収容所でまた足止めされました。発疹チフスが発生したのです。感染が収まるまで体育館のようなところで生活しました。イモのツルが入ったおじやが出ました。そのころ妹の泰子ちゃんはやせ細って大きなおなかをして、ぐったりと目を閉じたままです。そしてついに、母が恐れていた別れの時がきました。母は泣き叫び病人のようになり、毎日ぼんやりしていました。

私は2人の娘の母になりました。折にふれ「泰子ちゃんは風呂敷に包まれて逝った」とつぶやく母の気持ちを思いやりました。

40

「終戦のあとさき」

安井 弘子（89歳）

あと半月余りで終戦という昭和20（1945）年7月、父親代わりの祖父が孤独のうちにこの世を去った。

戦争が苛烈さを増すなか、国民学校五年生だった私は祖父母と浜甲子園に住んでいた。だが、近くに川西航空機の工場があり、敵の攻撃目標になるとして疎開命令が出た。

私と祖母は再婚した母の住む九州熊本へ。祖父は会社の責任者として大阪に残ることになった。間もなく会社が空襲で焼け落ち、祖父はひとり篠山へ帰った。戦禍のさなか、先祖の思いのこもった家屋敷をただ一人で守りながら、見続けていたかったに違いない。

祖父死亡の連絡を受けても、すぐには切符が手に入らなかった。山陽線は不通。やつと山陰線経由の列車で祖母と篠山に向かった。途中敵の艦載機の機銃掃射を受け、列車はストップした。乗客は近くの草むらに逃げこみ、その後まっ暗な列車で一夜を過ごし、やつとの思いで篠山に着いた。祖父はすでに親戚の手で遺骨になっていた。悲しみは深く、私は体調をくずし親戚の家で寝こんでしまった。終戦の知らせは祖母と親戚から聞かされた。やつと空襲の呪縛から解放され、体中の緊張がとけた瞬間であった。やがて元気を取りもどした私は祖母と復旧した山陽線で帰路についた。記憶は定かではないけれど広島に入った。とある駅に列車は止まる。窓から見える

ホームの前方には、包帯をぐるぐる巻きにした人たちが杖や棒をたよりに立っている。ホームの脇に1台のバスが、かろうじて原形をとどめて焼け焦げていた。いくつもの電線が焼け落ち、垂れさがっている。電柱もくの字に曲がっている。

近くを流れる幅広い川原には牛が2頭倒れている。おなかのあたりが黒く丸く焦げている。何かわからない不気味さを感じた。原子爆弾が投下されたことは、あとで知ることになる。ここから先の鉄橋が破壊されていて、次の駅まで徒歩で渡れとのことだった。どうやって渡りきったのかはよく覚えてない。祖母と私は親切な青年たちに助けってもらって鉄橋の向こう側に到着した。渡りきる寸前、よつんばいになった時、リュックの口から袋が一つ落ちた。ひらひらと舞い落ち、やがて見えなくなった。

白日のもとに、わが身をさらしても敵からの攻撃はない。戦争は終わったのだ。安堵とうれしさがこみあげてきた。やっと我が家にたどりつき、一番に私のリュックから祖父の位牌を取り出し「ただいま」と手を合わせた。そして位牌に語りかけた。「もっと早くに戦争が終わっていたら、会えたのに、いっぱい、いっぱい、いろんなことをしてあげたかったのに」。

このようにして私の戦後が始まった。

「空襲におびえた昭和20年」

竹田 ムツ子（89歳）

毎年8月15日が巡ってくるたびに戦争のことを思い出します。終戦の年の昭和20（1945）年1月ごろからは戦況の悪化が国民学校6年生の私にも感じられました。当時、私は現在の宮崎県日南市に両親、妹の6人で暮らしていました。何かにつけて節約、節約の時代でした。国民学校の卒業記念の写真すらありません。

米軍機による空襲が激しくなったのは5月ごろからで、集団登下校をするようになりました。登校途中に空襲警報が発令され、家へ引き返すことが続きました。6月になると、畑仕事をしていた近所のおばさんが、米軍機の機銃掃射に遭って亡くなったり、田んぼに爆弾が落とされました。夏休み前には学校は休校になりました。そのころは朝から弁当持参で防空壕に入り、夕方、壕から出るという生活でした。

7月になると、夜間も空襲が始まりました。わが家に近い油津港（日南市）付近に焼夷弾が落ち、商店街が全焼しました。その火災を私たち一家は防空壕から目撃しました。私は腰が抜けるほど恐ろしい思いをしました。この空襲では近くの山にも、たくさんの方の焼夷弾が落ちました。山火事にならなかったのが不幸中の幸いでした。

そのうち、いろいろな噂が飛び交いました。近いうちに油津港の

沖から艦砲射撃があるというのです。両親は、子どものうち3人を伯母の家に疎開させました。伯母宅は私の家から一里(4キロ)ほどの山間にありました。毎朝、伯母と一緒に3キロほど先の山の畑へ出かけ、畑仕事を手伝う日々でした。

そして8月15日。夕方、さつまいもの草取りなどの畑仕事から戻ると、誰かが「日本は負けたよ」と言うではありませんか。私は一瞬、真つ青。体の震えが止まりません。「日本が負ければ皆殺しになる」と信じていたからです。夜の8時ごろ、両親が迎えにやってきました。親子6人が久しぶりの再会に泣いて喜びました。一里の夜道を家族そろって、テクテク歩いて家へ戻りました。この日はお盆。わが家の仏壇で仏さまに手を合わせ、「ありがとうございます」と、お礼を言いました。

令和5(2023)年度寄稿

42

「空はど」までも真青」

山内 利津 (85歳)

例年八月は、特別な意味をもって感慨深い月となっている。

当時七歳だった私が、その記憶を記すのは、年代として最小とな

るのかもしれない。

両親と兄二人姉二人そして私と七人家族の平穏な日々が戦争によつて一変してしまいました。上の兄は兵隊に、姉達は軍事工場に動員し、下の兄は学童疎開、そして私だけが両親と暮らすことに。

私の住む函館は、ドック、青函連絡船、北海道の玄関口としての鉄道の始発駅等々と地方都市でもあったので激しい空爆を受けたのです。

警報が鳴り防空壕に入る間を失い、押し入れに隠れ私が一番下に、その上に母がそして父が重なり布団をかぶり、息をこらした恐怖は忘れがたいものです。

次の早朝大八車に日常品と私を乗せて両親は、郊外の家に疎開したのです。

夜空を焦がす空爆の炎が遠目に見たのもその日のことでした。

学校もその頃行つた記憶が無いのは、休校だったからでしょうか。一年生の入学記念の写真の私はセーラー服ですが、母は上っ張りにもんぺ姿の貴重な一枚となっています。

食事は、空き地で作った野菜を母は上手に料理し鮭缶を使った「すいとん」は美味しく、今も思い出して作ることがあります。

八月十五日、ラジオの前で、父が日本は敗戦国になったと言ったこと、そしてその後のことなど知る由もありませんでした。ただ、いろいろなことに統制や検閲がありました。

子どもながらに一生懸命だったことがあります。それは、母と汽

車で知り合いの農園に行き、私は小さなりユックサックにスイカを一箇入れてもらい上機嫌での帰り、駅のホームに警察官の姿が目に入り、反射的にホームを走り抜けようとしたことと、そのときリュックのスイカが背中を右左に打ちつけたことなどが、なんとも愛しいと思います。子どもが持っていたスイカは、検閲には、問題は無かったかもしれません。

兄や姉達も無事帰り家族七名が卓台を囲みつつましくも平穏な日常が戻りました。

戦後の物資のない時代も人々は、逞しく前向きに頑張りました。その体験を語りあえる両親は勿論兄弟も亡くなり九十四歳になる姉一人となりました。

八月を迎える度に口ずさむ私の俳句を最後にペンを置きます。

八月や われ七歳の眼裏に

八月や 国防色という色も

父が引き 母押す荷車 雲の峰

当時の男子の出で立ちは、戦闘帽にゲートル、上着もカーキ一色で、それを国防色と行っておりました。疎開するとき、荷車に乗った私は、夏野をわたる風や匂い、カッコウの声に一時幸せでした。

43

「空襲警報に殺された」

神谷 勉子（55歳）

私は昭和43年生まれの現在55歳。なので、戦中どころか、戦後のどきどきの記憶もない。ただ、おばあちゃん子だった私が、祖母から繰り返して聞いた「私のおばさん」の話をしてみたい。

私の母は、4人姉弟の次女で、弟が二人いる。長女の「私にとってのおばさん」は、戦争中8歳のとき結核で亡くなった。だから、私はその「おばさん」に会ったことはない。

祖母はいつも言っていた「逆縁の不幸だけは、したらあかんのやで。一番の親不孝やで」

戦争中、敵機が迫ると「空襲警報」とサイレンが鳴る（と聞いた）。すると、小学校から子どもたちが一斉に下校。「解除」といわれると、また学校に行く……。

一日に何度も繰り返される、この空襲警報にまつわる頻回の登下校。

おばさんは、体があまり丈夫でなかった。警報が発令される中、近所の子供たちはみんな帰ってきているのに、娘はなかなか帰ってこない。だいたいぶたつたころ、やっと下駄の音がゆつくりと聞こえてきた。やがて「あーしんど……」と、帰ってきて、上がり框に腰を下ろした。とたんに「解除!!」休む間もなく、また出ていく。下駄の音がゆつくり遠ざかる……。もともと体力がないのに、一日に何回もこれが

あつて、くたびれ果てていたそうだ。

祖母はこの話を私にしながら「だから、戦争に殺されたようなもんや」とつぶやいた。

夏休みには、ずっと祖母宅にいた。だから、お盆は一緒にお墓参りに行く。けれど、不思議な約束事があつて、私は決してお墓の掃除などの手伝いはさせてもらえず「転ばないように」とお寺の隅に座らされていた。

「お墓で転ぶと死ぬ」という迷信を、祖母は信じていて、それは「あの子もお墓でくけたんや」とのこと。

だから、大事な孫は、もう絶対に、連れていかれないように、転ばないように、座らせておく。

私も、掃除などすべての雑事が終わって、手を合わせることができるときまで、蚊に食われながら待っている…。

私の夏の思い出…。

44

「平和への思いを届ける」

匿名 (78歳)

私は昭和20年3月12日に、神戸市兵庫区で生まれました。生後5日目に、神戸市はB29爆撃機による大空襲を受けました。母は生まれたばかりの私をかたい座布団で支えて背負い、家の中の防空

壕に入りなさいという近所の人たちの勧めもきかず走って逃げました。安全な所で私をおろすと、私の顔の皮は剥がれてずるずるだったので、この子はもう助からないと思ったそうです。

産後直ぐの身で逃げ回った母はもう疲労の極みに達しながらさまよい歩き、やっとのことで六甲の姉の家にとり着きました。そばにいなかった父は3週間しても、私たちをみつけることができず、自分の家に掘った防空壕の中で亡くなった近所の人々と同じように死んでしまったと思ったそうです。

父は戦地でマラリアにかかり、内地に帰されました。その療養中に部隊が全滅したことを知り、自分だけが生きて帰ったことが申し訳ないとの思いから、終戦後も精神的な病を抱えることになり、時々発作がおきて現代の兵庫医大の精神科へ入退院を繰り返しました。

母は近所の人に隠れて、まるで遊園地に行くかのように父と子供たちを連れて病院に通いました。病院の精神科は鉄格子があつてまるで刑務所のようなだと、子供ながらに思いました。軍人恩給や生活保護も「生きて帰ってきたのだから申請するな」と言う父の考えで受けなかった為、我が家はいつも貧乏でした。部隊が全滅し自分だけが生きて帰ったことを何年たっても苦しんでいたのだと思います。病気が落ち着いている時の父は戦争のことを一切口にしません、駅に手や足のない傷病兵がいると、いつも箱にお金をいれていました。

病気で元の大企業にはもどれず、小さな町工場で病と闘いながら働き、母は実家の家具工場の手伝いや仕立物などの内職で家計を支えていました。父の病が完治するまで15年かかりました。今、私がこの年まで元気で生きていられるのは、母が必死で私を守ってくれたおかげだと思っています。

「戦争は人と人の殺し合い、絶対戦争はしてはいけない」と、よく母は言っていました。私は母の思いを次の代につなげたいと思っています。



45

「満州での難民生活と引き揚げ体験」

匿名 (89歳)

今年も悲しみ、苦しみ、残念さがこみ上げてくる8月がやってきました。

1. 満蒙開拓団への入植とソ連軍の侵攻

満蒙に夢を抱いた父は、昭和17年2月1日、神戸港より出航し、フクトハギジャリコウスズ 満州国興安総省布特哈旗沙里講子、ぶつりやう 佛立開拓団に入植した。しかし、安楽な生活は5年と続かなかった。昭和20年8月9日、ソ連軍がソ満国境を侵攻、事態は急変した。

父と兄は招集され、残された母と姉と私(小学校5年生)が、20町歩の畑と家畜の世話に追われる身となった。日本の敗戦を現地住民が知って匪賊化し、治安は悪化した。匪賊からの襲撃を避けるため、団長は団員の身を案じ深夜まで議論を行い、救助をソ連軍に求めた。その結果、ソ連軍より捕虜として許可され、8月19日、白旗を揚げて戦車とすれ違いながら450名がジャラントン 扎蘭屯北官舎に收容された。

2. 捕虜生活からハルビンへ

てんぱいさん 毎朝8時に点呼を受け、8歳以上の男子と男装した婦女子は天拝山の石山に連行され、暗くなるまで破石の運搬に酷使させられた。父は過労のため体を壊し、生命の危機が起きた。病人等がいる家族は排除するというソ連司令部の方針により、我らを含む佛立開拓団4家族と十津川開拓団9家族は扎蘭屯を12月13日、出発させられた。開拓団から離れて単独行動となった我々は、チチハルを経由して12月18日、家畜専用の貨物列車に積み込まれ、北京よりハルビンに12月25日、着くことが出来た。

3. ハルビンでの難民生活

ハルビン日本人会に届けを出した我々佛立開拓団11名は、トキ

ワ難民収容所を紹介された。しかし生活環境を見て危惧を抱き、金策を工面して海東旅館に移る決心をした。

父と兄は全員を日本の地に届けたい一心で働いた。私も住み込み、餅売り、夕刊の立ち売り等をしながら頑張っていた矢先、全員が発疹チフスに感染し、死との闘いが続いた。父は病身であったが自分が倒れたら全員を見殺しにしてしまうと考え、力を振り絞って看病してくれた。しかし、体力のない幼い従妹2人が亡くなってしまうことから一行は海東旅館に見切りをつけ、再起を図って春日難民収容所に移った。そして、帰国の朗報を待ち望んでいたところ、昭和21年8月25日、知らせが届いた。病身の母は兄と父の弟妻らと担架隊に合流して、9月23日にハルビンを出発、我々は4日後、出発が叶えられた。

ハルビンを出発した無蓋車(屋根や覆いのない貨車)は新京、奉天へと走り続け、錦洲に到着した。頭からDDTを浴びせられ、検閲後、最後の難民収容所にやっとたどり着き、長い苦難に耐えた体を癒した。

4. 待望の祖国日本へ

アメリカの上陸用船艇LSTの配給待ちで錦洲難民収容所に16日間留まったが、港のあるコロ島行きの列車に乗り込み、埠頭に日の丸の旗がひるがえっているのを見て胸が一杯になった。

残っている同胞の幸せを祈りながら、「満州よ、いつか来る日まで」と心でささやき、悲しみと不安と希望を乗せた引き揚げ船は佐世保港に向け静かに岸壁を離れて行った。

5. 今でも胸に残る父の言葉

難民生活中、父からの励ましの言葉が何より生きる支えになった。

- ①どんなに辛くとも、死んではならぬ。
 - ②国籍、住所は忘れない。祖国日本が待っている。
 - ③働く事、生きること事を大切に、きつと幸せが訪れる。
- これらの言葉は今でも忘れることは出来ない。

46

「戦争にまつわる体験談」

和田 孝三 (82歳)

太平洋戦争において、私が実際に経験したことを記憶に頼って話してみます。

1945年8月15日(敗戦日)以前の幼少期において鮮明に覚えているのが、真夏の夜半にサイレンがけたたましく鳴りわたり、敵



機来襲との空襲警報で家族(母、兄、弟)共々近くの仮防空壕に避難していた時の長かったこと、暗闇の中「云い知れない恐ろしさ」と暑さで 警報解除後に家に戻りついても、まんじりもしなかった事が思い出されます。ちなみに大阪近郊に住んでいたので 直接の被害はありませんでした。

戦後になつての少年期において、食い盛りの餓鬼にとって「ひもじさ」の辛さは、まさに筆舌に尽くせぬものがありました。この思いは、我々の世代はみんな持っていたと思います。

敗戦後すぐに道路の横、堤防の空地という空地が、畑となり大根馬鈴薯(ばれいしょ)等々を自作して、絶対的に不足している「配給」を補う努力をしたものです。

就学前ですが、鎌を持ち鋤(くわ)を握ってほんのわずか、汗を流したものです。街頭に立つて母親と一緒にサツマイモの葉・茎を売ったこともありました。このようなことは、当時の少年少女にとって多少の差があつてもあたりまえのことだったと思います。

上級学校に進みさらに社会人になつても、戦争の「悲惨さ・反人道さ」を色々学び、さらに、わずかながらの体験を礎にして、人の道に反する戦争を絶対に起こさない世の中にならなければならぬと痛切に感じました。また、その思いを微力ですが、一人一人に地道に伝えていきたいと思っています。

これが戦争に巻き込まれた我々の責務だと思念している次第です。

47

「自分で護った小さな生命(いのち)」

山本 一恵

今年は戦後60年、広島、長崎原爆から60年と、メディアを中心としてさかんに取り上げられている。

50年ではなく、どうして60年なのか?よく考えてみると、戦争体験者の全員が今年で老齢域に入ったのだということに気が付いた。あの悲惨な負け戦を直接言葉で語ることができるのは、私たちしかない。聞き伝えでは物語になってしまう。当時、全国民がそれぞれに戦争を体験した。たとえ子どもであっても逃れることはできなかった。

私が生まれ育ったのは甲子園、当時は兵庫県武庫郡鳴尾村と言い、全国で唯一の村立中学校(現・県立鳴尾高校)を有する裕福な村だった。甲子園球場をはじめ鳴尾競馬場、海水プールも備えた阪神パーク、甲子園ホテル(現・武庫川女子大学キャンパス)などの施設、苺摘みや芋掘り、潮干狩りや地引き網漁、海水浴や蛸狩りなどの楽しみ、電車も夏は透かしの車体と籐椅子に模様替えという風雅に恵まれた平和な田園地帯であった。

ところがその付近に川西航空機という工場があり、電車沿いの林の中にも航空機を配置するなど、大空襲の標的となる条件も備えていた。このために終戦間際になって、「火垂るの墓」に描かれているような悲惨な大空襲を受けることになった。その前触れであろうか、

艦載機が頻繁に飛来していた。

昭和20年の夏、私は国民学校4年生だった。ほとんどの生徒は集団疎開か縁故疎開に行っていて、学校にはほんの少しの生徒しか残っていなかった。授業もほとんどなく、毎日、松の木運びや、馬糞拾い、兵舎(校舎)の半分が兵舎になっていた)の掃除などをしていた。それでも一応勉強道具をランドセルに詰めて登校していた。

その日も警報が鳴り、それぞれ家の方向別にまとまって急いで下校した。途中、私はつまずいて転んだ。その拍子にランドセルの中身が勢いよく道に飛び出した。慌ててそれらを拾い集めたが、みんなはずっと先を走っていて、やがて見えなくなった。私は自分の息遣いを聞きながらひとり走っていた。やけに道が白かったのを覚えている。と、その時、目の前の道を黒い影が横切った。鳥? 殺気を感じた瞬間、さっと旋回して戻ってきた艦載機からバリバリバリッ。私は訳も分からず物陰に逃げ回った。あたかも殺虫剤の噴射から逃げ惑うゴキブリのように。咄嗟に動物的感覚で、すぐ前の家の門前に架かっている石橋の下に潜り込んだ。その間も艦載機からの銃撃は続いた。付近の窓ガラスや屋根瓦が砕け散る音を、案外冷静に聞いていたような気がする。

どうやら敵機が去ったらしく、付近の人達が被害状況を見届けるために出てきて、私を見つけた。足首が橋から出ていたのに無傷だったのは、私の運が強かったのか? 敵が下手だったのか? ようやく安心して橋から出ようとしたが、腰が抜けて動けなかった。

やがて警防団のおじさんに背負わされて帰ってきた私を見た母は「艦載機の機銃掃射があつたのに、今まで何処をふらついていたの?」すぐく心配したのに」とえらい剣幕。おじさんから説明を聞いて、今度は息苦しいほどきつく抱きしめられた。途端に力が抜けて大声で泣きじゃくった。いつまでもいつまでもそうしていた。

その後、8月5日の夜に大空襲を受け、家は跡形もなく焼け落ち、豪の中で母は火傷を負った。そして、その十日のちの終戦を迎えた。



48

「梅桃(ゆすらつめ)」

島本 幸昭

毎年、春の訪れと共に庭の片隅で梅桃が小さな花をつける。梅雨時期になると赤く透き通る様な丸い実が群がって先へと駆け上がる。指で触れると呆気なく掌に溢れる。愛おしむ様に口に含めば、日本中が戦火に脅えて逃げ惑う昭和20年へと引戻される。

ときあたか

時恰も私が小学4年生を迎える頃であった。一家はその半年前に、大阪から戦禍を逃れて郷里の広島に引き揚げて来たばかりであった。

ところが大本営や軍港を控えた広島の上空には、連日連夜敵機の襲来で、学校にも満足に行けず挙句の果ては学童疎開に加わる破目となった。

嫌がる私に両親が言うには、万が一空襲が激しくなつて何かが起きた時、私だけでも残れば安心できると諭されて、不承々々県北の山村の寺に向かう事になった。

その出発を間近に控えた頃、庭にそれ程大きくない木が他の木の陰になって小さな薄桃色の花を咲かせていた。

母に問えばユスラ梅と言つて花の散つた後に紅い実が生り、食べると結構美味しいと言う。それを聞いて気に掛け乍ら広島を離れた。

山寺の不自由な集団生活にも漸く慣れたころ、2カ月振りに母と妹が面会に来て呉れた。

駅から山寺まで道程は幼い5歳の妹には過酷で私が負ぶつてやると意外に軽く、見ていた母親は兄らしくなつたと喜んで呉れた。

山寺に漸く辿り着き夫々の親子の団欒が始まり、母が携えて来た数々の心尽しの中に紅いエンドウ豆がアルミの弁当箱にぎつしり詰められているのを見て、母の方を窺うと母は此れが家の庭のユスラ梅だと教えてくれた。恐る恐る一粒摘まんで口に入れると、初めて味わう甘酸っぱい味が口に広がり、中から小さな種が舌に転がった。

母は今日の日に間に合つて良かったと笑みを浮かべ、妹が食べたがるのを宥めながら待たせたと云つた。

二人で見る見る中に種の山を築いたのを見た母は目に光るものを見た。自らは一粒も口にしなかったのである。

翌朝母は、帰るに際して、空襲などでは死なないから安心して勉強する様にと言い置いて再び元の道を妹を連れて広島へと戻つていった。

あれ程固い約束をしたにも拘わらず、8月6日、父や妹共々、私独りを遺して原子雲の風塵と化し、二度と私の前には現れなかった。

梅桃は春が巡り来ると往時と変わらない紅い実をつけて、逝つた者達を偲ばせ、過ぎし日を彷彿とさせる供養の数珠となる。

合掌



49

「孫達へ」

匿名(82歳)

R大(仮名)とS亮(仮名)、元気にしていますか。

今日は、日頃から君達に伝えたいなと思つていることを手紙に書くことにしました。

今、君達には平和があり、親の愛情をいっぱいを受け、何不自由なく暮らしています。

それが当たり前と思っていない？

おばあちゃんの子どもの頃の話聞いてくれる？

私が3ヶ月の赤ん坊のときから、4歳になるまで、4年間太平洋戦争が続きました。

日本のハワイ真珠湾攻撃から始まったアメリカ（太平洋周辺連合国）との戦争です。

空襲警報が鳴ると、防空壕に防空頭巾をかぶって、いり豆を一握り持つて入るのです。

防空壕の中は真暗で雨の後など水浸しです。そして私の生家も降るような焼夷弾によって丸焼け、西宮は火の海になったそうです。真暗な空に火の渦巻が見え、これは今でも覚えています。

そして、広島と長崎に原爆が投下されて、両都市は一瞬にして壊滅し、たくさんの方々が亡くなりました。このことは、君達もよく知るところでしょう。この原爆を経験したのは、世界で唯一日本だけなのです。

やがて、日本はアメリカに降伏し、終戦になりました。その後、憲法で日本はもう絶対戦争しないんだと教えられ、子ども心に安心したものです。

終戦後の生活は衣・食・住すべて不足していました。私は破れた布靴をはいていましたが平気。ワラ草履・裸足・破れた服の子もいま

した。給食も粗末なもの、いつもお腹が減っていたので、全部食べました。

小学校のクラスで一人、かんな笑顔のない少し大人びた女の子がいました。両親が戦争で亡くなり、戦争孤児になってしまい、「カトリック教会少女の家」がその子の家です。

どんなに悲しく寂しく、毎日学校へ来て、親のいない家に帰っていたことでしょう。

この戦災孤児もたくさんいて「鐘が鳴る丘」という歌が流行したほどです。

この戦争でもっとも悲慘な生活を強いられ、どれだけの尊い命がどんな思いを遺して亡くなっていたか計り知れません。

戦争して勝っても負けても何一つ得るものはなく多くの大切なものを失うのです。

その後日本は、経済成長を遂げ今、危ないながらも78年平和が続いています。私達が今の生活を送れていることは決して当たり前ではないこと、感謝することになればなりません。

露・ウクライナ戦争・難民・地球温暖化問題・コロナ禍等考えると奇しくも「世界はひとつ」と気付きます。平和で「世界はひとつ」になってほしいものです。

君達若い人が、世界に目を向け、自分の意思をしっかり持ち、二度と同じ轍を踏まないように切に願っています。

おばあちゃん達、老いの身には皆が平和な国に生き続けてくれる

ことを、祈るばかりです。

長々とご精読ありがとうございます。(笑)

祖母より

50

「戦争を聞かされた思い出」

東田 すみ子

お婆の二男は戦争に出され、毎日、口癖の中、目には涙。私はその話を聞くと、いやいや聞いてすごした。

冬の雪の寒い日、船が舞鶴に着くと人のうわさを聞くと、皆で福知山行きの汽車に乗り舞鶴の岸壁まで行った。人々が船から降りてくる時、おじも、お婆も、今日は船に乗っていないか、息子の名前を叫んでいた。それは悲しい時でした。私がまだ2歳か、そんな時のことでした。

時が過ぎ二男は、ある日の帰りの船に乗っていたのに、船中でマラリヤになり、亡くなっていたことが後でわかりました。

毎日、家に帰れば、空襲の音、家は黒くローソクの明かりを消し震える毎日。三男は中国で捕虜になりシベリアへ抑留。シベリアでは鉄道の仕事をさせられ、場所(地名)は「チタ」と言っていました。私がおじにみせてもらった物は、自分で作ったスプーンやコップでした。シベリアでは、食事のままならない日、食べ物「黒いパン」。お

いしくなくても口に入れて、仕事につき、身体の弱い人達は、「水、水をくれ」と叫びながらその場で息絶えたと聞かされ胸が痛かったです。

おじさんは、なんとか日本に帰ってきましたが、それからひまな時には、自分たちの友を思い、仏像を彫って弔っていました。そのうち一体はロシアの人に届けてもらい、草ばの陰から自分の心を皆と分け合いました。と話を聞いている時、自分が今、ここに生かさせていること、自分の尿を飲んでいたことなど……。

今まさに、ウクライナとロシアの戦争、終わりになって平和の日を私は見たいのです。

令和6(2024)年度寄稿



51

「母の少女時代」

滝井 知子 (71歳)

96 才になる母は老人ホーム(サ高住)でおだやかにくらしている

が、私達の青春時代とは全くちがったものだった。聞き書きした。都会暮らしにあこがれた祖母は、勤め人の祖父と結婚し、3人の娘をもうけ、幸せに町で暮らしていた。

昭和12年に中国との戦争がはじまり、祖父は出兵し、昭和14年に戦死してしまった。

祖母はしかたなく子ども達を連れ祖父の田舎で暮らすことになった。病弱の曾祖父母の指導を受け、慣れない畑仕事をした。近所の高齢男性に田をすいてもらえば、労働で返さなければならず、体はえらかつたろうに思う。

母は女学校に進学したが、やがて「収入がないようだから女学校をやめますか？」というようなことを言われたが、戦死した家族にいくばくかのお金が払われることになったらしく、勉学を続けることができた。

やがて対米英戦争になり、学生はみな出陣したり、工場へ働きに行くことになった。

母は、家から一番近い航空機工場へ働きに行った。近いと言っても2時間はかかった。食事は、こうりゃんご飯、豆粒ご飯、すいとん、汁は実のない塩湯で、副食はたぶんなかった気がすると言っていた。週1回の帰宅で家から持って帰った食事を分けあって飢えをしのいだ。土曜帰る時、終バスに間に合わず、暗い山道を1時間かけて歩いて帰ったらしい。

12月頃より昼夜2交代勤務となり、夜帰れば、ノミの急襲で寝

ればすぐ夜明けとなるくたくたの生活だったらしい。作業着は油まみれになり、洗剤も少なく、家で灰汁にしばらくつけて洗ったらしい。友達の中には栄養不良で脚気や急性肋膜炎になる者もいた。宝塚歌劇の生徒もいたが、労働の軽い事務をしていたらしい。

やがて戦争は不利になってきて、工場を宝塚の山に移動することになった。山に坑道を掘る仕事は、女子には体にこたえた。旋盤を一つ一つ運ぶ仕事をしている最中、米軍の飛行機がやって来て、目の前で運んでいた旋盤などに次々機銃弾があたり、いつ死んでもおかしくない状態だったが、幸運にも助かることができた。航空機工場は大空襲で全滅した。既に3月女学校を卒業しており、7月に次の進学先へとすすんだ。

終戦間近の8月のはじめ、やはり勤労奉仕で暑い中、防空壕を掘っていた母の妹は、突然高熱を出し亡くなった。熱中症かもしれない。やがて終戦を迎えたが、曾祖父母が次々と亡くなり、祖母はいったいくつ葬式を出したことだろう。つらい年月だったと思う。

母が進学先へ帰る途中、梅田付近では、生死のわからない横たわったままの人をたくさん見たらしい。父も兄が南方で戦死し、戦後遺骨収集に参加したが、手がかりはない。

もっとたくさん不幸を体験した人もおられるだろうが、こんなことは二度とおきてほしくない。母とともに願う。

＊参考資料

平成10年1月1日発行 「歌垣郷友」第71巻

「幼少年時の戦争体験」

梶田 忠勝

私の家族は8人で、兄弟は6人、男5人女1人、私は※おトンボです。長男が昭和18年に出征し満州国へ。次男はダイハツ工業に勤務して軍用車両を生産のために出征はなしでした。

父親は炭焼きと炭を販売し、片引き車で伊丹まで配達していました。また、秋には柿、クリを取り市場に出し生計を立てていました。私の6才〜8才の時の戦争体験は、昭和20年6月6日大阪大空襲があり、池田市新町、中橋の近くに住まいしていましたが、その日の夕方には、東の空が赤く染まっていました。その日兄は、大阪商業高校に通っていましたが、電車も止まり、両親も大変心配していました。夜10時頃に歩いて帰ってきました。

昭和19年頃から、五月山周辺に、頻繁に焼夷弾が雨のように落ちてきて、そのたびに空襲警報のサイレンがなり、家の前の歩道に防空壕があり、逃げ込むか電球を黒の布で囲い、ラジオを聴きながら厳しい日々を過ごしていました。ある日、兄と焼夷弾の落ちたところを見に行きました。不発弾があり、断面は六角形で油が周囲に飛んでいて焼け跡がありました。その後、東京空爆、広島原爆、長崎原爆投下と続き、終戦を迎えました。終戦後、多くの焼け出された人々が親戚を頼って来られ、私の家にも2家族が来られました。家庭の食事については、サツマイモ・サツマイモのつる・ジャガイモ

汁、お米なしの毎日で、粗食で食べ物がなく、時には南瓜の種や蜂の子をフライパンでいって食べた事、イナゴもサワガニも食べました。配給でいただいたお米は玄米のために一升びんの中に玄米を入れて竹の棒でついて白米を食べました。また、どこの家でもニワトリを5〜6羽かっていて玉子を楽しみにしていました。盆と正月には鳥のすき焼きが大変楽しみにしていました。終戦後、学校へ行っても教材も無く、遊ぶ時間が多く5〜6月には4〜5時間目に山にどんぐりの実を取りにいきました。集めたドングリは業者が取りに来ていてパンと交換し、給食に出すと聞いていました。また、藁草履わらぞうりで学校へ行くため1日で破れて、母親にしかれました。学校の帰りは、川づたいで友達と魚を取りながら帰りました。洋服は兄のお古で過ごした毎日でした。近所の人とは助け合いが良く、おかずやごはんや珍しいものや、子守までどちらが本当の家かわからないくらい仲良くして頂きました。

父からの話では、兄が満州国に出征し、終戦前の昭和19年11月に戦地よりハガキが届き、病気で入院しているとので悪いようでした。終戦後12月の朝に、ただいま帰りましたと軍服姿で玄関口で家族全員が涙・涙・涙でした。

今言えることは、戦争は何も良いことはありません。人々を不孝にします。衣食住・教育・経済・人間関係にしてもその他……戦争は二度と起こさないようにしなければなりません。

※おトンボは、きょうだいの中で一番下の子を示す。

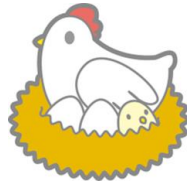
「食べる物が無い」

山田 昌（94歳）

昭和16年12月に始まった勝利の戦も追いつめられて激しくなり20年3月10日には東京大空襲があり、そして大阪、神戸と大都市が次々と焼け野原になって行き、ラジオのあの勇ましい「軍艦マーチ」の報せも何時の間にか「海ゆかば」の曲に変わり、アツツ島玉砕などの悲しいニュースになり、又かと言うことばかりに、そして、「近畿管区発表!! 敵の編隊が紀伊水道を北上中」という放送に変わり、しばらくすると池田市五月山山上の砲台からドンドンと音が鳴り、白い煙があがりました。すると鳥の群れのように戦闘機が飛んできました。よく見ると、兵士の姿が見えるくらいの距離で飛んでいて、寒気がしました。急いで防空壕に入りました。

毎日警報が出て、出たり入ったりでB29の爆音と戦闘機のだどどと言う機銃掃射に悩まされました。

伊丹の飛行場を目当てにやってくるのですが、的が外れて近辺に爆弾が落ちていました。池田の五月山



や池田高校の校舎には市民の配給米が置いてあり、そこへ、焼夷弾を落とすので、お米にオイルの匂いが付いて、そのまま配給されましたが、洗っても洗っても取れず、煮ても取れず、釜まで匂いが付いて結局、釜も米も捨てました。

配給は少なくなり、空襲から身を守ることと食べるものに人々

は、必死でした。少し物があると言えば皆走り、家で木箱に土を入れて、どこでも作物を作り、もう食べられると喜んでいると、誰かが持ち去ってしまったて泣き寝入り。また、ニワトリを飼って玉子も食べられると喜んでいても、夜に鳥がコツコツと声を出していたかと思うと、朝には鳥も玉子もなくなっていて悲しい思いをしました。また干してある洗濯物も持って行かれました。そんなことを今言ったら笑われるでしょうけれど、子ども達も食べるものもなく、お昼はサツマイモ一つ、それでも持ってこられる子どもはまだ良くて、持ってこれない子どももあり、運動場の鉄棒に、ぶら下がっている姿は、可哀想でした。配給はますます少なくなり、何の草かわかりませんでした。配給は丸めて団子にしたのが配給になり、それ少数が少なく皆でとりあいつこしていました。

夜は、黒いカーテンを引いて、豆電球一つで暗くて何もできず、空襲に備えて服のまま横になっていました。やがて、広島、そして長崎に原子爆弾が落とされてどうにもならず、8月15日に隣り組の皆が集まって、終戦の放送を聞きました。これから先どうなるのだろうと言うよりも、皆何か終わった、ほっとしたと言う感がありました。暗かった部屋が明るくなり、空襲で起こされることがなくなりました。この戦争は何だったのでしょうか!! 悲しいことばかり、父や夫、そして息子を失った人はどうつぶなってもらえばよいのでしょうか。戦争は悲しい事ばかりだと思います。過ぎてしまった遠い79年の事です、今の世界は一触即発の時代になり、戦争の恐ろしさ

を知る人も少なくなっていき老いていく今、少しでも知って戴ければと思つて書きました。平和な楽しい日々が続きます事を祈るのみです。

54

「思い出」

伊藤 啓子（87歳）

昭和19年4月、私は、川西国民学校1年生になった。

祖母に祝つてもらつた赤いランドセルは、ボール紙でできていた。

1年経たぬうちにふたはちぎれてしまった。

春の身体測定は近くの青物市場まで行つて、パンツ1枚になつてキヤベツなどをはかる※かんかんばかり看貫秤にのつて記録。私は、18 kgだった。

春の遠足は、今も五月山の中腹に見える鳥居のある所。学校から歩いて橋を渡つて登つていった。「おにぎり おとしなはんや。」と年のいった女の先生に注意されたが楽しかった。

ある日、教室に白いゴムボールが一つ配給された。先生は「くじびき。」とおつしやつた。くじにあつた女の子の顔は、今も、はつきり覚えている。私はうらやましくてうらやましくてたまらなかつた。クラス中みんなそう思つたことだろう。

学校の前には文房具屋さんがあり、色づけされた※きびがら黍稗や色紙などが売られていたが、そんな物は買えなかつた。

文鎮はセルロイドできていて机をたたいたら破れてしまい中から砂が出てきた。

それを「たべろ。」といつて、友達をいじめている男の子がいた。なぜか私は「やめとき」と言えなかつた。

1年生の時は、まだ授業中に空襲はなかつた。しかし、よく運動場をかけ足した。1年生1クラス50人くらいで8組まであつて、それが6年生までだから全校2千人余り。あの広い運動場を列をなして走るのだから砂けむりがもうもう。目もあけてられなかつた。私はぶかぶかの靴を履いていたので靴がぬげてしまつて、あととはどうなつたか覚えていない。履き物がなかつた。みんな草鞋わらじか下駄だった。

祖父が桜の生木で下駄を作つてくれたが、重くて重くて裸足の方がよかった。草鞋わらじは、1日履いたら、もうあしたはぼろぼろで、履けない。戦後も、とにかく靴がなかつた。今、電車の中でみていると、老いも若きも、実にさまざまな色、デザインのおしゃれな靴をはいておられる。当時のことを思うと涙がこぼれてしまう。

私は、今も「自省の鑑」と書かれた1年生の時の通知票を持っている。「事をなすに慎重細心なり」と担任の先生が書いてくださっている。

87歳になった私、歩く時は、このおことばをかみしめるようにありがたく思つて守っている。

「ありがとう。」大塚好子先生。

おわり

かんかんばかり
※看貫秤とは、大きな物を量るための秤で、台の上に物を置いて、その重さを目盛りに表示する仕組みです。
※黍稗(キビガラ)とは色彩を施したキビ・トウモロコシの茎の芯と細く割いたその皮



「川西市平和モニュメント・瞳(どう)」

《MEMO》川西地域周辺の戦争被害

近隣(阪神地域)の西宮、尼崎、伊丹、宝塚、池田などでは、空襲により犠牲者が多く出ました(特に空襲による罹災面積は、西宮市が18.4%にのぼり、兵庫県下の戦災都市のうち、神戸市について第2位、第3位は尼崎市でした)。

川西地域では、軍需施設※の主たる施設がなかったためか、『川西市史』によると犠牲者は5人でした。その死因は、米軍戦闘機(艦載機)による機銃掃射等によるものでした。また、日中戦争(1937年)からの戦没者数は、軍人軍属合わせて716人でした(一番多い地域は南方諸島でした)。

※久代地域に「大阪陸軍兵器補給廠川西分廠-1942年設置」があった模様(跡地は自衛隊阪神病院など)。

〈池田〉

大小あわせて9回の空襲 1945年3月～ 死者 17人 戦没者 640人以上
主たる空爆先：ダイハツ池田工場(軍需品生産) ・五月山(魚雷格納庫) ・大阪第二飛行場
・池田中学校※現高校(住友プロペラ工場疎開、食料営団の疎開倉庫などに転用)

〈伊丹〉

- ・1945年3月～ 繰返し空襲 空母艦載機、B29爆撃機により 死者28人
- ・伊丹(大阪第二飛行場)飛行場、東洋紡績伊丹製作所などへ

〈宝塚〉

- ・1945年7月 B29及び小型艦載機約150機による空襲 「川西航空機※」宝塚製作所中心に死者23人

〈西宮〉

- ・1945年3月～8月 10回にわたる空襲で死者637人 被災者66,500人余

【※川西航空機】…「川西」という名称は、地域や自治体の名前ではなく、`創業者の名前、です。当時の日本の主たる航空機メーカー(現在は新明和工業)で、主に海軍用航空機を製造していました。工場は、西宮市鳴尾地域、神戸市東灘地域、宝塚市良元地域(跡地は阪神競馬場)、姫路市の4か所にありましたが、すべて空襲により壊滅しました。

【編集後記】



この5年間で54編の戦争にまつわる体験記が寄せられました。その中には、一回では書き足りない3年にわたって寄稿していただいた人もいました。

寄せられた体験記の内容は、ご覧いただきましたように、満洲引揚、空襲、学童疎開、勤労奉仕、自分自身ではなく親からの聞き取り、などさまざまです。

それらの中でも、やはり身近な地名、特に川西市や近隣の市町名などが出てくるとすごくリアリティが感じられます。

また、ある方の寄稿文の最後にはこう書かれていました『私はこの戦争体験を書くことが辛くて、筆がすすみませんでした。本当は忘れてしまいたいのです。でも一方では、忘れては駄目だという心もあり悩みました。そして決心して書いたのがこの手記です。』

この言葉は、今回、お寄せいただいた多くの方のお気持ちだと思います。

今年で戦後80年を迎えました。NHKの今年の世論調査によると、すでに9割以上の人が戦争を知らないという結果だったようです。

戦争を知らない世代にとって、戦争にまつわる体験記は、戦争が個人の命や生活に与えた影響を「自分ごと」として捉えるきっかけとなり、平和を希求し続けるための重要な資料となります。この記録集も戦争を二度と繰り返さないために、今を生きる私たちが成すべきことを語りかけてきます。

貴重な体験記を寄稿いただきました皆さまには、改めてお礼申しあげます。

ありがとうございました。



川西市の主な平和施策の経過

年	内 容	備 考
H 1(1989)	非核平和都市宣言	
H 3(1991)	人権擁護都市宣言	
H 3(1991)	市民平和バス(広島) 実施 ~H14(2002)	※バス5台~1台 (0泊2日)
H 4(1992)	第1回かわにし人権・平和展 公民館等も含め開催	※現在に至る
//	「平和と人権を考える市民のつどい」 7月開催	※H20(2008)年まで実施
H 7(1995)	戦後被爆50年長崎平和交流 16人	
H10(1998)	平和モニュメント「瞳」完成・設置 駅前ロータリー内	
H12(2000)	戦後被爆60年長崎平和交流 12人 市民平和バス 2台	
H16(2004)	「折り鶴平和大使」事業 実施 ※市民平和バスに代わり	※現在に至る一大使：市民2人
H17(2005)	市民平和バス1台 戦後被爆60年長崎平和交流 12人	
H18(2006)	北朝鮮による核実験に対して市長名で国家元首に「抗議文」送付	※以後、米国、ロシアの核実験に対しても国家元首に送付
H25(2013)	平和首長会議(旧平和市長会議)加盟 ※県下36番目(41市町)	※R6(2024).8.1現在 国内自治体加盟率99.9%
H26(2014)	非核平和都市宣言25周年 折り鶴平和大使(長崎)2人	
R 2(2020)	戦争にまつわる体験記募集開始	※新規事業
	R2(2020)~R3(2021)コロナ禍により「折り鶴平和大使」中止	
	R4(2022)~「折り鶴平和大使」事業再開	
R 7(2020)	戦後・被爆80年 折り鶴平和大使(長崎)派遣	
//	戦後・被爆80年 戦争にまつわる体験記録集 発行	

非核平和都市宣言

世界中の人々が等しく平和な暮らしを営むことは、人類共通の願いです。

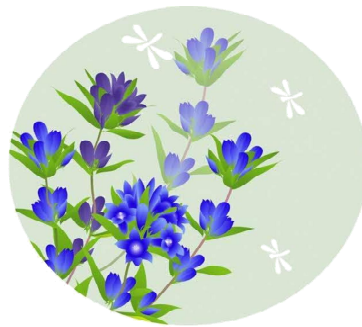
それにもかかわらず、地球上の全生命を滅ぼしてもなお余るほどの核兵器が蓄積され、世界の平和に深刻な脅威を与えています。

わが国は世界で最初の核被爆国として、核兵器と戦争の恐ろしさを全世界に訴え、その惨禍を絶対に繰り返させてはなりません。

私たちは祖先から受け継いできた猪名川の清流、豊かな緑、そして人類共通の財産である青く美しい地球を永遠に守り続けていくためにも、核兵器をつくらず・持たず・持ち込ませずの「非核三原則」を遵守するとともに、恐るべき核兵器の廃絶を願い、人と人との憎しみあい傷つけあうことのない世界の創造を求めて、ここに市民の総意のもと、川西市を「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年(1989年)7月14日

川西市



戦後・被爆 80 年 戦争にまつわる体験 記録集

編集・発行 川西市 人権推進多文化共生課

令和7(2025)年9月

川西市中央町12-1 TEL 072-740-1150 FAX 072-740-1151